



芭蕉袖草紙上

5
4469
1





4469
1-3

5
4469
1

昭和九年
十月一日
購求

凡例

一 冊子に記述する一代の伝記たりとや
凡そ花書にして東武の人なり秘記
書物に記述するものなり一書一
不記しておのれを授命を得ず
おのれを授命して授命を得ず

易い事ありははてしなく世を
はやくしむるはかへりよこ
板の書物に記述するものなり
凡そ花書にして東武の人なり秘記
書物に記述するものなり一書一
不記しておのれを授命を得ず
おのれを授命して授命を得ず

一 冊子に記述する一代の伝記たりとや
凡そ花書にして東武の人なり秘記
書物に記述するものなり一書一
不記しておのれを授命を得ず
おのれを授命して授命を得ず



一松島獨峰之圖古吹こ社もそ新出り
 一遊ふあつひは人考つ
 一いふいふうのまゝは後集
 一も化者もさういふこと拵集の時化
 一去をあるとあるははり又も後集
 一お波後の板りちこれ八板の正
 一そけう打
 一附録は四巻の世ぬ板打別
 一こと事林りあつあるそのを後令
 一ちこれ選つあつあるははり又も後集
 一かむむるちりり

文化八年 未初林 花屋茶奇淵

色蕉袖草紙上



浪速 花屋茶奇淵拔

延寶九年

次韻

晋伯倫傳酒徳頌樂夫繼以酒玩
 讚青醉之續信徳七百五十韻

二百五十句

抜投とまいては仕たい花とま
 ちここのまのてのまもあるく

響の足維程もく 陸そへて 桃青
 這夕以 在子 可 見 矣 其角
 彈骨の力たり、ふぬるさこ小 才登
 志くく凡の松よたり 楊水
 差よ来て 軒をかゝる 角
 灯ふりりと 依りけん月 青

霰雨り麻うゝ心のあるうり 水
粟よ揮さゝり香糸の守 丸
他産登眉成客ふよびつらん 青
意悲舟の閑つれくうと 角
風のと食よ朝の下成うす 丸
先胆成え知るおの夜悟 水
灯火成々く出雲とせよなこ 角
古きめくぐよ鬘引 け 青
武士のぬき成まゝくか 水
女いたなくよ子さそいひ 丸
極あゝく後のぶつゝたる眼 青
人の猫の力成肖 け 魚
露よ露て且易訓易忘 丸
乳かゝの嚙のうゝる蒼葉 水

暮秋成花と倉とよ暇ふれ 角
白奥をうとすより條巻成宴 青
寛平のおふ人術滑合あり 水
清土拈灯成柳して睡る 丸
はゝとるりらる女成れ書きて 責
血指の絲よとと板やあうらん 角
ふゆふゆいゝらららてたみと 丸
獄囚正成あくるいゝ 水
天帝よ目安成きて言えあけ 角
柱成極て星極を 極 青
雨の擔子風のうすけ冷うに 水
秋よ對して雨華堂の記 丸
白款仁お紫村よ返し 青
漢の火氣銅成射る 角

原^ハ真^リの謙^め 鞭^ハ狗^ガ 攻^ケ 別^レ 丸
 安^ノ 房^ノ 市^ノ 崎^ニ 流^ル 人^ノ 身^ヲ 注^ス 水
 向^テ 後^ニ 行^ク 徒^チ 古^ノ 曉^ノ 鐘^ヲ 角
 拍^ヒ 托^ス 初^メ 音^ノ 魂^ヲ 青^ノ 鬼^ノ
 忘^ル 人^ノ 往^ル 又^シ 似^ル 着^ル 卦^ヲ 水
 雨^ニ 吹^ク ね^ル う^ま 風^ハ 書^ク 丸
 夕^ニ 暮^ル 息^ニ 又^シ 烟^ヲ 吹^ク 思^フ 以^テ
 民^ヲ 至^ラ ち^ツ 後^ニ 攻^ケ せ^ル 丸 角
 矢^ノ 本^ノ 愁^ル 草^ノ 野^ノ 味^ヲ 丸
 又^シ 高^ク 分^ル 富^ノ 婆^ノ 古^ノ 友^ノ 水
 月^ノ 又^シ 人^ノ 言^ハ 尾^ノ 子^ノ 向^テ 丸 角
 表^レ れ^ト 又^シ 攻^ケ 踏^ル 丸 音
 徒^ニ 至^ル 小^ノ 社^ニ 何^ト 也^ノ 丸 水
 朝^ニ 夕^ニ 抱^ク 又^シ 丸 丸 丸 丸 丸

葉^ヲ 成^ス 葉^ニ 葉^ニ 花^ノ 丸 音
 風^ノ の 吹^ク 枝^ノ 葉^ノ 下^ニ 丸
 山^ノ 差^レ 踏^ル と^シ 丸 角
 本^ノ 謹^ム の 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸
 細^ク 敵^ニ 鬼^ノ 灯^ノ の 燈^ノ 籠^ノ 丸 角
 踊^ル 竹^ノ 衣^ノ の 鉢^ノ 小^ノ 丸 丸
 酒^ノ の 月^ノ 市^ノ 伽^ノ 坊^ノ の 丸 丸 丸
 意^ノ 素^ノ 流^ル 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸
 仁^ノ 骨^ノ の 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸
 日^ノ 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸
 葉^ノ 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸
 天^ノ 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸
 規^ノ 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

青海若ういし麟琴と彈丸
 糸の首不^レ定^レ旅泊^レ賞^レ力
 右^レ秋^レくふ^レ金^レの^レ信
 淋^レ一^レ瓜^レ書^レま^レ落^レ下^レ互^レ依
 夕^レ真^レ重^レく^レ負^レ辰^レひ^レく
 枕^レの本^レ小^レ輝^レが^レけ^レか^レに^レ寐^レ
 枕^レの^レ信^レ水^レあ^レ書^レあ^レく^レい
 夏^レの^レ身^レ成^レ何^レと^レ鏡^レふ^レさ^レふ^レて
 我^レは^レ信^レり^レに^レよ^レと^レと^レら^レん
 生^レけ^レく^レ成^レ魂^レ折^レれて^レ念^レ量
 沈^レ切^レ海^レて^レ雨^レの^レ火^レ青^レし
 竹^レの^レ奥^レ下^レま^レう^レ系^レに^レ音^レか^レく
 狄^レの^レ里^レけ^レ足^レあ^レく^レひ^レ獨
 配^レ新^レ人^レ声^レの^レ小^レ名^レ帝^レ成^レ下^レは^レそ
 青 角 丸 青 水 丸 角 青 丸 青 水 角 青 丸 青

朝^レ嘆^レ去^レく^レむ^レる^レ麻^レく^レの^レ山^レ水
 そ^レの^レつ^レた^レれ^レ女^レ房^レ又^レ長^レの^レけ^レあ^レく^レり
 吉^レ原^レ君^レ代^レぬ^レと^レも^レい^レさ^レな^レく
 捧^レ軍^レ勇^レや^レつ^レふ^レせ^レと^レ止^レつ^レて
 流^レき^レく^レ舟^レの^レ陰^レより^レ梓^レは^レ弦^レ列
 富^レの^レ屋^レ成^レ徳^レの^レ玉^レの^レち^レり^レま^レん
 摩^レ訶^レた^レ美^レ苦^レ奈^レ因^レ又^レ生^レル
 愛^レヲ^レ捨^レ子^レヲ^レ捨^レ毗^レ盧^レ遮^レ阿^レ毗^レ羅^レ叫
 嵐^レと^レあ^レて^レ風^レと^レや^レと^レふ^レく
 夜^レの^レ食^レ走^レく^レく^レ藤^レ是^レる^レの^レ比^レい
 蛭^レの^レ舌^レと^レく^レ再^レと^レ後^レの^レ丸
 片^レの^レ秋^レら^レら^レと^レと^レの^レ且^レ夕^レて
 を^レあ^レく^レく^レく^レく^レ味^レり^レあ^レる^レ後^レ青
 も^レの^レり^レて^レ鏡^レと^レ教^レの^レけ^レり^レと^レ丸
 青 丸 水 角 水 青 丸 青 水 角 青 丸 青

繪と酒りりの奥そて位 角
 小瓶うへ本松と帯さうそせ 青
 狛戸の神成齋モイニ—— 糸ヒ 水
 煉掃之礼用於鯨之脯ホシ 角
 中といの公翁齒菜刈入丸
 風いしく半とへ水色なるよ 水
 荒居よるの枯屋とく 青
 おそろしく白骨のうひ付てなる 丸
 曾呂利新法城漢と扱サ 角
 禪小信豆齋と月の詩を刻キザ 青
 雷スリガキ益鳴て色蕉とく 水
 花の今報キ返と羊成並切 角
 橋よわくち成はくるとはま 丸
 三 不帯ヒ息ヒ去年の電成掃 水

花よ照る大オハライニ神宮の奇抄と 青
 幣よ果つらる託コトツケの 角

次韻

雁ツルよさるとらん
 るみさふん

春沈よとと梅有もととるあり 其角
 今年け秋系成森そて 丸
 月城連よ坐マ鳥帽よとあつこ 揚水
 筆よ法利成おとくうーや 桃青
 おぼこさ川流草の葉成り丸
 早ササ山路よ踏とくせける 角
 夕よゆる葉とかまはよるよ 青
 夜盜招風の音成合号よ 水
 雨の園よとけと敵とくせたる 角

舞臺よ朱の盾披打戸 丸
とひやうにうい氣よ世成驚こ 水
木とつゝくそき舞のふかしく 青
移さめ侘て宮の炉小根涼温（まな） 丸
あゝゝわいつく帳の紙（ま） 角
女の孰うつらとこころを飲すこく 青
若ら氣きあしてやつれ潤る 水
ストント糸入落してい命も 角
とりあえ守ねおはる 月 丸
秋の末つゝと暖脈成成通（ま） 水
落の院の御凌成とよ 青
危ゆる舎人の花よかろり 丸
みせの番成寅と秋て 角
渾沌（スツホウ）翠よ糸て氣小好入 青

あゝとの菌辛標と松と 水
ふ比やむ細よ針と生小糸 角
甲れよ尾多とと出山志 丸
菱野れ豊の芝成ととと 水
勅使 草原の朝及蕪切（コウチ） 青
秋成啼鳥の鳥成ととし 丸
夏やさのみの世鳥とに 角
津のふれ生田の表の初月夜 水
道とよたけよと念（チカラ） 接す 水
霜下りて又刈里の鶴配り 角
寺くの納豆の声行とつよ 丸
よれつれき捲花とりの光と流 水
固炭あふて小井とゆりし 青
膳とよほつと水ととと 角

辰よりかろれよ半生一たる 丸
井の戸城人待下女も藤巻たて 水
あそけし入てよ眼こころよ 青
泪のこころほんくこころい丸
千しとせぬくこころあのも木 角
葉付ひてす花をさるる 青
如泉法昨こころま力あり 水

次韻

母よりと家まハ杖の世中世丸
海にく月小あづる花 揚水
わくれも花子の葉まうと花と 揚水
新こひとたり海嵐漸く 其角
言れ客真の客とさるまハ 水
後秋の事ハ歌を役る 丸

楽白のこ隠て風流林こころ 角
携よ舟織とさそてあハ 青
娘こそ希女房のさして花 丸
意あつれたるあハ付は 水
さるて花の板をさこころ 青
拵ゆく宿よまを子うむた 角
髪結の住り人屋へ遠しと 水
卒如婆の男ゆこころ 丸
骨刀土恙袴のまらたさり 角
瘦たる馬の鞍よ鞍 青
内よと味てもんハきりハ 丸
果とくさるの耳小あけけ 水
依もかひて養子たたく秋志しと 青
を浅屋土とて朝ほき力 角

筆耕寸青磁の牛よ花付て
 燕茶の流くむら
 后宮れ教入車やうふら
 狐たーや上の御着丸の極
 既中かつ死さめておのを踏はる言
 挑灯切ておのうけろい
 風前の角内と身成情々か
 入の山ふま振よりり
 雷の斧下こしそまんに
 云々一龍頭の園
 俗よい入麻崎の海の底ある
 船の目れ赤本地赤螺
 何故是て蛤のを採てまこら
 いそくくと雨養なむら
 水 丸 青 角 水 丸 青 角 水 丸 青 角 水 丸 青 角

力松茸夕草の葉の月好は青
 粟刈敷て園子子を以
 水汲紀て筆尋る丸
 登りあらんまのひてある丸
 櫃と子またくまらる丸
 古家の位ま園よと丸
 わたらの赤丸倉風の荒ふる丸
 麻の葉よ生る小箱と丸
 即ち松とほふる生の浦抽子丸
 れたれくて清丸隣城住丸
 以て麻ござんけ後と丸
 豆羹の食たく程よ丸
 人死を待て生ま丸
 青 角 水 丸 青 角 水 丸 青 角 水 丸 青 角 水 丸 青 角

石、曰花のめりたり、咳にたり、
 木玉にっなで、風成、舞柳、水、
 三、花雨、差の、結ハ、差ハ、空キリ、青、
 驢馬の進ニ、とら、舞、キラ、角、
 大根の、糸、織の、実、れ、こ、あ、さ、う、
 聖の、く、く、舞、よ、文、付、て、や、る、丸、
 表、や、大、桶の、櫃の、腰、を、記、
 有、徳、一、床、小、婦、と、ん、引、と、る、青、
 り、や、く、と、舞、入、り、の、こ、こ、こ、こ、こ、
 通、ハ、以、首の、位、て、た、と、む、水、
 透、ハ、一、と、恨、る、糸の、目、う、け、塚、
 換、を、お、と、助、後、い、一、ら、れ、二、
 今、春、力、に、村、風、と、や、一、三、味、線、と、
 や、さ、一、や、さ、と、一、記、後、こ、ら、れ、丸、
 水、角、青、水、丸、

秋の、衣、服、切、竹、成、こ、れ、い、角、
 任、持、ち、る、一、し、て、め、る、葉の、戸、青、
 面、白、く、盡、曲、成、ね、い、一、に、丸、
 海、老、ち、し、し、た、る、海、苔の、青、衣、水、
 急、時、の、松、の、根、の、と、れ、れ、を、青、
 炎、世、よ、あ、り、雪、れ、め、神、角、
 ト、同、一、一、鷺、の、着、の、ま、り、と、水、
 蛇、の、氣、立、て、草、の、蛇、以、丸、
 笹、原、に、皇、居、よ、う、れ、紙、張、物、角、
 清、水、の、司、麦、と、糝、青、
 い、つ、と、糸、る、法、味、ち、の、習、こ、こ、に、丸、
 表、尼、と、り、の、叙、あ、り、ま、り、水、
 表、館、る、拾、子、拾、ひ、は、遺、し、て、青、
 芥、菜、よ、麻、の、裾、引、て、入、角、

和算の道一ゆくの指の丸
 茶の指の有^ナ指の丸
 佐^{ニウロキ}佐^{ニウロキ}の青丸の丸
 只袋とを宿に風をねとる
 扇折る女の夏は捨てられて
 まい江戸は無わと色味
 むろそと歩とほくはてやうり
 顔ふる茶のふもとあて
 ねくに未て上るう澄る声細
 法眼うち一武老給とやん
 宮造る^{ツツ}道の^{タケミ}名系して
 慶斗^{ツツ}冠の櫻は折うけ
 納まる茶の庵のうらめいれ紗
 故園今とく^{ツツ}蘭^{ツツ}腥^{ツツ}——
 丸 水 丸 青 角 丸 水 角 青 水 丸 青

風の月熱の清雪は緑なる青
 黄ふる小侍の怪しこよる角
 山路うららのまをまを丸
 篠の枝折れは猿より丸
 雲月の挿と深くまのそ丸
 気とろとくれし人の板ら角
 血気端て凡を刀板打る音丸
 古昔なとほて壁辺は丸
 折れて花よおまうま丸
 孤ハ酔て醜醜よ丸
 青

天和三年

屋栗

酒債尋常往處有
 人生七十古来稀

詩あそんと年成食う酒債部 其角

冬湖日暮て駕馬 鯉芭蕉

干純さ夫は冥夜もろく人

と縁人の鬼成後しむ角

月ハ純かうろた睡る膝成に角

鴨の形しるくお原れし角

恥あしぬ信成りふり世をれ角

酷雨 山崎 傘成茶角

無井のこてしと蓋に深きし角

稻場の雲よ恙殿と云角

一の姫里の床およきつれ角

斬名よたつと云歌と責なり角

清も怒の霊と啼らつり角

うさ世は沈むき食の癡角

寄へ花 質重しとさい人依義

道道あうれ蝶丁又よ角

廣もろる世諧おもくふとや角

鞆くこして森ぬお紅ぬ月角

舞入の道はくしにけり破角

たつとい中人と葛うしとふし角

初りそ美逢ハ誘小紫角

黒銅くろくおとく女乳角

枯屋髪栄際角成をふら角

魔神と使しぬ荒海の崎角

鐵の弓矢猛と世よ出よ角

帛懐と粧れあつた角

心定く四睡の床成吹角

うはと火消て指の灯角

下司后朝成孫と云力と堂
西此成後と包むあやしく
表れいふふ深味は吹調人
みちのくけ美さぬ石目角
武士の程の丸麻まうく
八声の弱れ雲成若はく角
詩あそ人と花成貪酒債れ
美湖日くれて駕典吟

天和三年

鹿栗

憂方知酒聖
負始覺錢神

芭蕉

花より花成我酒ふく食

眠と月を陽たの 瘦一品

鶴啼て青峰夏成陽るん 嵐雪

工

臺子礫と手折る唐梅 其角
力成渴を江の夢と芦列て 嵐
浪のそくもまたふと釣うけ 華
霞登洗く雨う 朝の明もじ 晶
朝よ烏帽子成ふう紙衣蕉
浪人の鳥さう成あう背引雪
やぶれ一板入りひそふ泥 蘭
そまさらう日一宗有成拍まひる 角
藤の退之の肝魂を奪 晶
雷鳥のくけ喜は浦成鳴るん 蕉
ゆころ海一 鯉原る 雪
傾城の鏡成捨し林代り 晶
羽織と角成張を風流雄 角
仇一燈 権成出た州の力 蘭

破蕉保て詩の上ヲツク
朝鮮ニ西此と稱る遠き
法くし去ぬ火の松浦行権晶
めつらこるあけをくの萱庇雪
蚤ハ松の五枝のむ蘭
挿入ぬ孰い六十の立刑して
所所は胡座らく世成夷之蕉
人の怪異摠長の言の對子馬
松田肩まき雪の暖雪
ささかや陣中似せ斬るく蘭
山壁は飢て餓成貪る角
盗みおれ力よ伯夷は足流し蕉
とくさい武士の憤 叶角
見ろーに勢を成やくや紫拖蘭

笑ひさ人やお帰る鬼晶
嘆の無云成母よさあはれて雪
法ひよあふあふはるる蕉
くれよ拙廬山の列とねなん角
柳よとよみて瀑布は酒呑菊

草のそよめ我へ夢をいほるふれ 其角

蘇よおのめしうふをのこりれ

深川菴

三蕉時分して鹽と雨はす我哉

ふつら雨のこひをまて

せよふもさくら糸紙のそりれ

天和四年 貞享改元

幾言よんしは女の松さし

何事院も花は来小なりと云

二聖人の寺

月花のこれやまののま

平とます ムツキ 月花のこれやまののま

破屋なるちのちのちのち

そのまのまのま

飛さし ムツキ 月花のこれやまののま

秋十とせ ムツキ 月花のこれやまののま

雨あつて ムツキ 月花のこれやまののま

音 ムツキ 月花のこれやまののま

三上

友のの木 権に ムツキ 月花のこれやまののま

第土川 ムツキ 月花のこれやまののま

屋あり ムツキ 月花のこれやまののま

様と ムツキ 月花のこれやまののま

杜 ムツキ 月花のこれやまののま

中 ムツキ 月花のこれやまののま

馬 ムツキ 月花のこれやまののま

外 ムツキ 月花のこれやまののま

又 ムツキ 月花のこれやまののま

志 ムツキ 月花のこれやまののま

二十日 ムツキ 月花のこれやまののま

西行谷

卒 ムツキ 月花のこれやまののま

ち ムツキ 月花のこれやまののま

あ ムツキ 月花のこれやまののま

高 ムツキ 月花のこれやまののま

千 ムツキ 月花のこれやまののま

とも仏強よひうれし命の巻
をふぬれぬるをまうして

傷慕いく死つらむけりのね

曾於ある切に一本さうて

悪うつてワレま言せよ切う書

西上人のまの唐の何とい奥の

地より三はくちをやとそし

の清水を今もそしとそる

雲とくしつらみむとよそはせ

後醍醐帝所後

所朝年と終て志のふ竹と志のま

不破

秋うそやそ殺も危も不破の国

冬の日

さひも逢の雨よわころひ後衣い

ところくの風はゆめたり煙区

なるまひ人我さへまねそそる者

ねきの女土はふまなりしこ松

ふとおひひきて

ねう風の身は竹舟よ修る卦

芭蕉

たそやとくしるさの山原花

野水

有明のこも酒をつらうせて

荷公

かいらの露とらうあうる

重五

朝鮮のはそりそり地の匂ひまよ

杜園

日のちりしつらま茶が外

正平

我菴の露よそらうはつらうそ

水

髪とやとるがまのふしの何と

燕

花のつりしと乳花青の控 五
ことえぬ辛塔波女のとくと位 分
乾法のりのつらつきをく火を焼て 蒸
つるしひ多へたこー一虚家 四
田中かろこやんち柳あるところ 分
考よふぬや人のちんもり 水
たそくれが横よ泳む力細し 四
隣さうしよあ所よ下りある 五
二の尾よ近情の花のほろむく 水
珠ハむらう小とらう鼻う心 蒸
そりおもよ羞とく教おろま 五
いまそ眼の矢とこふつしあ 分
ぬを人の記念のねれ文をんて 蒸
志とー一字紙の衣と付し水 四

星ぬきこを理も帰る北雨 分
冬うれふてひとり庵草 水
あらしと砕けし人の骨の 四
鳥絨ハまはすの圃の古 五
あられその福よしけ乾云 水
秋も一斗とらうと扱そ 蒸
田東の李白う坊よ力とて 五
巾よ木槿とこさむ花芭 分
年の終と始くぬよれ夕言に 蒸
箕よ鯨の魚がいつくま 四
ころいのりめ方の星守むへく 分
すよハ妹の眉くさにゆれ 水
後ひとく居り湯にまがの花涙 四
廊下の藤のうけつこ 五

冬の日

たのしみ世年

やうとくちとて振らと

紅雲のあかりも横をて帰る

野水

霜よやうとふる草の食 杜園

母も葉もたつめる様のねとれて 芭蕉

つづくぬぐれと車引たり 持弓

磨よた袖は鶴紋を写らぬ 重五

枕巻と手折貞徳の富 正平

雨こゆる浅香の田原日るまで 田

奥のこころと死と只あはれあふ 水

床ふけて後まのいとある男 百

縁さぬたけの恨のこりし 真

口とくと痛とち死るかな死 水

内月のかことこよ首送るせん 五

六

小こまに盃とせし川酒ひ 萬

方ハまうれ牡丹盃人 四

繩あまのかまのいやれ登るて 五

らめくしこのま地産切ら町 号

くけ死のまとも色娘のいあけ 画

赤止いらくのまをさういゆん 水

梅箱よ縁とらるる縁はのまき 分

うらしと靴よ紙燭とけしと 蕉

か陰ふらと梅の掃の帯はひ 水

三味強し人布被のせは人 五

及とらうと天徳ておらる基は長 蕉

縁とましくのさてし七十 四

奉加りた所堂よ黄金寺はひ 五

いふ山の傘は下奉りては 号

蓮池の邊のふよふよのやぶ書 四
 雲よまのけりし霧や霞を記 水
 力よたてし唐編の髪束うれて 兮
 意とぬ所 添添とさう川 蕉
 秋暉の虚よ声きくきつこい 水
 霧のまにたふ糸ほろろり 五
 殺より霞がひらき心後に 蕉
 いしりし典侍の鳥の内侍も 四
 三ヶの花鸚鵡尾ふりのちんちん 五
 赤くくまいとむ越の搦括外 兮

冬の日

秋をいふ事
 けみみひて力より霧にまみれ 社園

こほりちみりく水のいれ書 重道
 遠原の雲霞初物人の美に負て 野水
 山の市門なねしあけの春 芭蕉
 馬糞くくふきに風のちんちん 荷台
 茶の湯者おしむれこの痛英 正平
 ころろたけし物よむぬかしつみて 五
 焼籠ふくみよむさけらるる 四
 赤秋のこしやふ力を撰くれす 蕉
 昔まこと言し流賀樂の坊 水
 焼肉夜次六ららの辰孫して 四
 紅花買ふたふ時鳥さく 兮
 きのよたのこことそ雛城地が 水
 命婦の老より采ふんこと 五
 梅つきまては浪の水にぬれり 兮

佛食へたる真解とあり
縣ふる花見次第と作られて
五形董の畠 五反
うれしき花見を催しりと
まゝの馬の眠と歌あり
水
おつとよや矢野の橋のそらふ
田
花屋の松とよみてまうぬ
分
於しよの柴刈もふのひつゝ
水
毎日はとむく刀賣年
五
雲のね呉の國はまらつじ
分
津よ高尾の行袖かきく
燕
あゝ人と橋と振よるはさん
五
芥子のひとくよるははに
禪
三ヶ月のひとく晴く後れたる
灘

秋湖にけふの暮りて
言ふものも心合して
聲うた念佛と歌と
かけうとま行燈か
水
ねしひのひも夜の帯
五
こくれ花たまりひま
分
そのそれ日瓜我も
灘

冬の日

炭賣のおのほろこと
重五
ひとの粧いと鏡磨きむ
荷分
花蘇馬骨のそらふ
杜
鶴ころるさるの方
野水

風吹ぬ秋の日籠る酒ふき日 芭蕉
秋織らかごと市に振する 羽生
か後川や胡麻み代をうや近
いとららの舞かうのりの比 五
たりへそ布搦うこんこもれて 水
うささい廿子紙裁り三平 圃
拾うれてくぬるる巻れとあれも 笠
火おぬ火焼かきんを又ん 蕉
門吉の暮よ紙まわつて藤る 五
血刀うくを方のらうきに 吟
寄あうと幸際の様七ツきく 圃
冬やうの納豆たぐくあはく 水
とれは位極の衝とまそにける 意
傍ものいとけ教冬をほほ 意

白燕濁らぬ水よ羽成あはひ 兮
宣旨かこく知と講る五 五
八十年以三ツる童母とらて 水
なうたちとむる七ツのつゆ 圃
西南は桂のたれのをむとれ 意
菊のあらしふト本うら音 蕉
然の家よ賢ふる女んてうら 五
物籠よ栗成は入日の書 兮
とちりきてねくこがらふ月 圃
はくもも白る舟曇の文 水
寅の日れ且と熊治の疾記て 蕉
そがらかりふ南京の地 萱
いがれして陸ともきよぬの像 兮
泣よこころの清き芽の根 五

新そふらつてきたおしり
水
昨夜の下は寝つてさうさ
蕉
水の方かしくしを廉ちやうて
笠
藤らまはるる後山賣らじり
雨
田

冬の日

田家眺望

雪力や鶴のいくがひか
荷
冬の羽日のたるとれありり
芭蕉
かー捨山家の体と本れ葉つる
重五
おれする牛の柱こはまじり
杜因
音もなき具足小力のるん
羽笠
酌する量菊切りはい
野水
秋のころ旅の所連飲いたに
蕉
閑く晴して富士見寺
分

新として椿の花のる音
圓
系と系ゆくとそひる風の音
五
雛子返る烏帽子の女立三十
水
庭は本層作るこひの落衣
笠
おけやう山橋は梅足露
竹
麻ころとつへるの集あむ
蕉
江をゆく獨樂庵と世紙
五
我が出よあはるほるが
圓
たひ衣笛は長よかたうら
蕉
籠輿ゆるい本丸の山あひ
水
骨伝えして坐は洞を
蕉
乞食の羹が世あつたの
分
尻のうら。尾が引籠と捨
圓
所幸に進む水のみら
五

好よてる年の小角豆のむら 氷
昔屋よりくはる固流く 月
けしゆの小坊文よむれて 竹
おろく蓮の実まら蓮の実 蕉
静りこふ飯壳のそく方若 五
をぬおくさつて風やうれに 四
物持をを根ふつれた行屍 笠
豆腐他もて母の喪よ入 水
元政の子の役も破れぬし 蕉
伏見木懐の種もれぬの 分
まらつた男描ひつと捨ぬて 四
妻のきつたの雪掃ぬとよ 五
水干狐秀白けりてつる 水
山茶花よけりてさのこし 生

冬の日

いづれ又よと羅面牛ばく何處 羽佐
指火小あしるうれとつての松 荷谷
とくは外下長に勢をちやせんで 重五
捨道よ宮女中とあよふ 杜國
銀よ捨るらん力かうと 芭蕉
ひらりよ揚ねとらん岐阜山 野水
熟田三歌仙
あつこはゆらうらるらんてあまの
あつこはゆらうらるらんてあまの
海られて鴨の声仔のふ白し 芭蕉
串よ鯨をあみる 鯛 桐葉
二百年我け山よ谷とつて 東藤
控の種よく秋ハ来よらう 工し
入る力よ鶴の音れらる空 葉
駕おき國の春負ま川 蕉

障雨の老たる母の涙うつと山
一さん笑一芍薬の意 藤
暮の工立二日とらなる月とめて 蕉
周は帰りと狐ふくね 葉
靈芝なる原とるに言ひて 藤
葉表元とるねの入りは 山
望まて衣の破れ縫つて 葉
秋の鳥の人食より 蕉
ねくひの程がれ泣かたて 山
夢の糸よ就成出續く 藤
美人の乳おむけろふ 葉
根夷の尊おふに膝とけと倦て 山
生海嵐すとふも袖ハ傷る 藤
世

木の方とらう西小所堂の窓山
藪又葛屋の十はうりんも 蕉
ぼつくと抱嫁はくち従人 藤
糸よ名も一痛の呪咀 葉
不二の根と望思しては糸まら 蕉
藤より産のひと山花らん 山
待たれは後必志のひうは枝ハ 葉
衣うはく小姓萩の戸と押 藤
力細く耐斗の箆ハツかりて 山
握いそく消かとの病 蕉
破れとら具足成園ふさる 藤
高麗の縣は畑作りて 葉
お深の庵紙よふお書と換り 蕉
ちひととまの永と目れ伽 山

雲の影護長藤あひまて 葉
青州ちのり藤の撮折 藤

熱田三歌仙

十二月九日一井亭

芭蕉

猿糸より青の夕羽衣

庭とくせいのほりの雪雲 一井

とやうくと見代あつ葉焼て 越人

紙漉成えよ所幸有ころ 昌黎

琴打て庭の上は花をいり 荷兮

障子ぬれいさゆる 竹 楚竹

起もせしやあふほひ怖れ 東睦

とこれい撃の汗ぬらひある 蕉

おけられて又うはるねとよ 井

乳と飲ゆる子の我はゆるし 人

麻布と様いふはと織ぬて 聖

芭蕉

蘭と取こめいほるせかた 兮

夕立のせよさゆら雷のきり 竹

馬もあつぬ山陰の雪 睡

小雄麻のそれと油袖小糸付を 蕉

花あつる後にはれちり為人

風よかちけて花のニッニッ分

畠よけくく理は遠なり 碧

病床

芭蕉

葉のひさしても花の枯れ

中あつと人のこころと

つころひて

雪と雪とよひかきれ名月

年くれぬとて子鞋とぬき

貞享二年

山家

徒知年を齒原に録るは

徒知とて

猿鳥古巢ハ梅ハかりに多

奈良ハあり途中

善財もやふもふた山に相見

二月堂集巻

あつちやうのの信光君の

あつちやうの信光君の

子筆

梅白一そのいも鶴とぬきし

秋風

非

決又西春寺任上人と

わつ衣又伏人の枕れやせよ

大はつあつちやう

行といれれ竹やうけ

湖あり眺る

幸津のねは花より

蛇う小島の業門我名と

やうてまの地のたつれ

しんひまらん

さうとものに横まう

大願和尚の近化は

やうてまの角ハ

梅急ておのるお

千鳥掛

和足亭

和足

かとほくもく我は多白の思ひあり
 麦粒かこころうる月ひの末 和足
 一ちしてまきとら鳥ゆふられて 桐葉
 久とよ袖残りれし名取に 叩端
 夜ふれて方待はるる情ひ 葉言
 るふとはうりの秋の風音 自笑
 控うのてまきふ麻に身をまじ 如風
 念方思ひ残こころふとくま 安寝
 通世道の案に一喝示し置 重浪
 長者の興よ背成ふけし 蕉
 おく指成るふ下狂のうつふ 足
 暮よかそふる八百の 警言
 葉

葉

森透る機織三つはむきとある 福
 むねりよ秋の力さうしり 辰
 それの秋をふるふちの悔ふも 足
 猶あはは猫舌晴れてる 風
 多辺控ふ鳥とら女心もめて 葉
 孫こめるとちかま情を 言
 遊よ短冊月ておちたり 宛
 巻さうつれを脊有るふき波 蕉
 天年と一筋よ夜しとまふひ 信
 五月の風のこや雨れと 風
 果る愛も本これては位とつ 笑
 長尾のか回た何名取らひ 足

熱田三歌仙

桐葉亭

竹の葉にんちやうさし董竹

くさ

あまのまゝて極やあゝ 叩端

田原より妙の童のいさかに 桐葉

云ふよと有るは井の中道 蕉

力置る雪の敷拍のふたで 端

酒のむ疾のいうにほーき 葉

双六のうらみ孤文よとそし 蕉

琴の凡とーむ独はうり香 端

髪下を侍従むむとめ表て 葉

野の宮れあしは妓まの紅 蕉

くさ掃よとちる叶紙と丹流 端

藝者とこむる名月の冥 葉

面白の拵女の秋の板とくや 蕉

煙風とーれく紅粉血 端

共

川原ゆく巻を兼ふ結分て 葉

舎利とる流よ釣日うつら入 蕉

かしくさかふるの赤尾の死に 端

羽織は酒成りつる極 全 葉

ふよとて女よ登たうらたの 蕉

ゆるく扇風の画よ洞ふと 端

すふまゝ一笛のいろはをばり 葉

三股のふね深川の 板 蕉

菴住やひいり杜律と味はて 端

花出たる作ここの蕎麦 葉 蕉

いふ言くは言をいふまを言あう 端

あはむ小僧袖いやか 葉 蕉

力めて板板山をたつらん 端

そい板血の流るむく 葉 蕉

印う雨のこゝに於ける馬の背
ひく山鹿の此冷ふ 音 葉 端
是れ見ゆる人の涙にさうれ
男やもの老きこれいふ
風うらた六年の取の七さく
市門とたく生狸の姿 葉 端
常盤山を築く助るを
産まのころ連歌所の松 葉 端

熱田三歌仙

桐葉

はくりしと履のそれの袖にちる
ひとり茶枝摘む菽の一家 芭蕉
白うけ山維子の籠をたどる
清水とをら馬柄拍の力 叩端
面をかき世に新賣る料の上 東暎

た

宿のこゝにけふ極子に極る 蕉
鼻紙は都の連立に付て 蕉
暮る大津に三井の鐘を 端
雪が俺ふ僕の時と袖とをよ 山
藤より危の四五の空 葉
松風の簀は雨か香はくし 水
佛を刻む西谷の僧 藤 端
鳥羽玉の髪にさう女まにまて
急かえやふる朝鳥の力 蕉
秋かかぬ味は拍食ひりり 葉
白子のたままわらうの海 山
浪よとる鯨の骨は花極て 藤 端
後月を於期のかつら伝道
是れおてかたに返る渡り 蕉 端

五重の塔のほとりうき
 鶴鶴の尾と蛇の困に懸れて
 風よみかおくくらの付
 葉ととりて扑の度ふと引
 田舎ありの物見こめたる
 うちうめく前意の書
 たられて君と酒買より
 根の持よ船ねよあて
 おはん帰京の時成らん
 雞祖のひかりのまけ
 様よの栗の竹成すのくそ
 輝つてまこと活掃の秋
 まなうたぐまの尾乃
 のとれふるま物焼て師
 藤 山 蕉 端 藤 山 蕉 揖 藤 端 葉 端 桂 播

八日の端れ星ニッ三ッ葉
 宮守の油とけつともか
 けくしのゆをゆき西行

田子

牡丹葉ふくくちあ
 庵ふりて

夜ころもいすこ
 葉よ葉よ

秋をへて
 ちて喰ひ
 年のくれ

うてな人の
 貞享三年

古畑中茶つとゆく男と

初懐紙

日の暮れぬこと小産けのゆかり

其角

砌よりきき去年の栢の實 文麟

雪村う柳えより輝さしと 北風

酒の幌よりあいの 月 三齋

秋の山子束のらねる愛らな 芳重

炭竈とぬてをれこしと 杉風

里しの麦田のさるむく縁 仙化

我のさるに雨おほひせよ 李下

朝よりこれ三時とおむ通るれ 舉白

念佛よれし傳いつくより 朱彦

らとすく連歌の興成よすん 蚊足

廿九

歌よせ来るむらねの声 千利

有明の梨子打鳥帽よ蒸らす花 芭蕉

ほ世の高成宴れえ納め 執筆

惜まれし君の本槿のさるたふ 鱗

は位女きぬこころちし 角

はふみ乳とのむ様の声悲し 齋

命と甲斐の冬ももえよ 枳

法の去我より髪とらねる人 杉

こころの記とつらよの戸 重

暖日より車とるふるしの後 下

梅の小雨はとちるかけろふ 化

砂るをさるる葉山子れ跡らと 砧

赤のくに酔て様成とる分 白

敷ちり眠とかこつる釣ほけり

元たる眉狐からんさぬく 蕉
けい嘆てふさげたえゆる若菜 枳
葉まけの風又矢鳥切りよ入 齋
おれとて下まけけら狐 罌 角
あられ方秋のくもる 傘 鱗
石の櫃 鞍 ちの方ふきすそ 白
われ三代の刀うけ 龍 治 下
永福の金乞くく松の風 化
近江の田植英流又死し人 弦
とく起て宵掃よせ人何と云 重
松よ茶の湯の浦あはれく 角
言筑紫よて人の娘成りつれて 下
弥勤の堂よれもひおぬし 枳
待 ちの鐘ハ墮たるまけ中 蕉

夜うらま 蟻の物く死れ声 化
雨さへといやかりなる 鄙 罌 齋
門ハ奥丁を夜涼の寺 白
狸不そにわらふ武老号空階 重
あゝおれ牧の所を撰よ 角
鶉の一声夕日成月に何ためて 鱗
乳の飯を秋さひれふて 下
いふは子の本のる狐死ぬを 白
はれたをさひくし時れ 罌 枳
ふあまさる物あつれり 揚 水
さうりういさび金山の何と 弦
は國の武仙狐名ある終にせ 角
京よ汲とる 醒 井 の 水 齋
玉川やぶのくく六のふと 蕉

江湖しよ年考にたり
化
舟の花のしれ精^{シラガ}もてあるか
重
舟うこせい葎うこよふ
水
南むく葛をの畑のまゝて
不
取と基^キが^カのつま
鱗
候^キの^カの^カを^カ合^カせ
取
費^カの^カの^カの^カの^カ
蕨
麻の青^カの^カの^カの^カ
取
小^カの^カの^カの^カ
取
名^カの^カの^カの^カ
下
停^カの^カの^カの^カ
水
角
車^カの^カの^カの^カ
角
梅^カの^カの^カの^カ
雨
千
春
二^キの^カの^カの^カ
齋

婦^カの^カの^カの^カ
重
狗^カの^カの^カの^カ
重
ね^カの^カの^カの^カ
取
菱^カの^カの^カの^カ
鱗
木^カの^カの^カの^カ
下
囚^カの^カの^カの^カ
齋
萩^カの^カの^カの^カ
下
向^カの^カの^カの^カ
春
ん^カの^カの^カの^カ
弦
こ^カの^カの^カの^カ
化
あ^カの^カの^カの^カ
下
傾^カの^カの^カの^カ
鱗
徑^カの^カの^カの^カ
重
井^カの^カの^カの^カ
白

梅やうと 薺ふ日ひありたり 齋
 つく再なるの灯ふれ清えぬ 峽水
 鮎とらぬの仲も 薺に 化
 浮城城なる方ふ朝日の有る死
 捧えりよて 搗 造り 秋 下
 信長の流まる代やすやうん 揚
 居士と叫る、わら玉の児 鱈
 紅は牡丹千里の香城分て 春
 手をとむ谷又出る温泉とす 峽
 岩根ふも重地地ふ城居に 角
 わら中三舟の若法沙とも 齋
 遠ぬ急下りか流す川ふ返音して 化
 管弦城こや流音ハ位るく 重
 夏雲の庵山よ泊る津一こよ 揚
 壺

千声とあふる 観音れ御名 角
 舟いくつ涼とふうくの川傳ひ 沢
 尾長にすしる松のまゝ 峽
 麻ひしられ七層れちなる白 白
 連流らりる表とひさし 白

一ツ橋

花咲て七日鶴ふる 林麻 芭蕉
 懐て蛙のこころ 細 搗 清風
 足踏ふ城まきと氷る谷て 攀白
 采とそ外城こころ 曾良
 名方と隣ハ麻なるまき 工齋
 枝えらうした相の葉城なる 其角
 墨衣ふるへいむの壳落て 風
 内外の下 向志何ありたり 白

とてふ立付子の使いつうーた良
一夜のちさり後ろにけよん 蕉
松明を教へんといふるい 陸角
生て捨てるの水を流るく 風
舞うとちあられぬ敵をせに教は 良
ことこの饒成あり山寺 齋
雪成さる川控やさうくは寄きて 白
虹のさうり日も白ひひき 角
去つてい温る成さるす力に 蕉
三つり麻のいつ 矢成有る人 齋
勢くくと軍に寄ある教とた 嵐雪
男かうくの白羽とぬる 風
集琴の明の風程成忘れさる 角
形くことく 牡丹あつて 白

耳うとく妹り告さるはとき 蕉
ほれなき天流に葉を成てむ 良
北焼て刀はうりの傳へるり 風
我る川壺と殿の和 拳角
指もとちお教やさく詠をて 齋
糸の力夜の吐痛るらん 雪
あとれくおやむ人のひかた 白
眉ぬく袖の雲を流はるふき 蕉
唐の書よめぬ取なうちやうて 良
ひり 買よ雪の山 通 齋
あふれさる名をふ控一破れ細 風
行やうぬくて塩やうぬ浦 蕉
相國の極路ひたすれとね 用
車成あうて葉のやとくひ 白

出さくく尾ふくもの先ふくろ
古池や蛙をひひるの音

三日月日記

破風は小日教やよらる夕をのみ

煮茶 蠅避烟

合歡 醒馬上

かこふる小田の水流るるあり

月代見 金氣

露 繁 漆 玉 涎

張旭はおかきふる醉の中 蕉

壺とた右にこくるしりし井

挈 帚 驅 偷 鼠

蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂

ふるに都は強る所 玉を蕉
ころくぬ首かきたる板の接
乳とのひ孫は竹と夏ふか

舟 鉤 風 早 浦

鐘 絶 日 高 川

新ころく 早苗の泥はききて 蕉

食ハすけぬ故き火の教

詫 教 三 社 本

顔 使 五 車 填

花 月 末 山 開

藤枝ははく老のうらひ寸 蕉

剪 銀 鮎 一 寸

裏面の海やふと巖らん 蕉

乾日け頭の紅をわやし

蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂 蕉 堂

風 猿 猴 早 乾

よつれつる黍のまらみく秋きて
内ハ火くほを危のりハ月

霧 籬 顔 執 輿 堂

霰 浦 目 潜 馬 菴

ぬく人忘てそ歌小似るも声
まごれぬ依の珠叔と服に

山 伏 山 平 地 菴

門 一 番 門 小 夫 菴

鶴 鶴 窺 水 鉢 菴

やねふらりてぬるをやけ
真ふつに初秋の音を以てを

臨 谷 伴 蛙 僊 堂

元禄中終

元禄中終

三

其 袋

夕 照

沽 荷

情 冷 の 望 火 ぬ ぶ る 西 日 ぬ

潮 落 こし ぶ 芦 の 穂 ぬ ぬ

雪 舟 の 外 の 鐘 と ぬ ぬ ぬ

宵 よ こ と 中 ち ら ぬ ぬ

入 舟 の ち ぬ 化 粧 ぬ ぬ

柴 の 負 ぬ ぬ 竿 と ぬ ぬ

山 寺 の 屋 も 狐 の ぬ ぬ

花 茶 来 ぬ ぬ 酒 造 ぬ ぬ

中 へ 平 辰 日 ぬ ぬ 鞠 の 音

白 蛇 胡 蝶 の 垣 と ぬ ぬ

結 強 成 採 の ぬ ぬ ぬ

乱 走 一 勢 成 走 と ぬ ぬ

洞へお祀記念のほくき音も出
竹も焼火よみれ垂し々
捧の力一つの忘れ候腹て
深つき深し裏の救うけ
み、はくのおのう徳やめむ
四十雀てそ凡も夕の
嵐

麻島山の丸又よあがり
多し雨し降り小陰掃ぬ
根ちち小若る人として候省
寂寂せしむとや一々志ハ
らくは詩のや風わらるる

寺よ藤てやろくふなる月足部
夜のそいそくま

方とやしおす葉い雨は持あつ
雨よ森て竹記さる方りうれ
す折く人紙やをむる月足部

船中にて

四月のや廿七夜も三日れ月

流川八更の舟

茶買よ茶の袋や板取中

茶買よ

茶買よけよたものせ人室丸け
年の市孫音買よ出く市れ
有書このさけうれしやうのんれ

貞享四年

流川八更の舟

茶買よ

青もりのすゝふはつひらき
くもれい華花さく極むれ

老慵

壯情もろも海苔をら老時うもせて
ふらた日し物うたぬそそ存れ
赤中やものもつゝ泣鳴る花

物皆自得

花よぬいん花ふるひそむ花
花のそと種い上やのい州

夏角の母五七日

卵つれも母まご右とすまきし
夏にまら母もくすう都る

荒きまの後にれて

秋ふるも下子のまごあられ

其角

名月や池をわらうておもす

句例別

揚泊よひまをこもてよけ
つれもろろこもてなまらぬ

露沾

つれ秋よりのぬこりし旅のつと
所をこもぬえ風をらの力
芭蕉
山陰よ刈田の秋のふきりひて
沾蓬
民者追はゆー早川の水
其角
暮るうけそにほりし花接露
露荷
おろこぬ窓に枝取くお
沾荷
傘の陰杖去くかいら傾けて
芭蕉
まうりむこー神山の民
露荷
暑き日れ汗が悲しむ持風
沾荷
まてー戸の蕨りたる
沾蓬

りそは五天のむうしはもあく 其角
襲ある傍に種撞せす 露荷
意とみつ鎌倉山麓深し 露沾
志はる狭とよ月入風葉 芭蕉
片清くうきほくはことの輝 沾蓬
若城はくしめて雑調しりり 其雨
花咲て入くまの草の庭 露荷
顔板ひろく山吹の指 沾荷
伝法語やたらあ映の春とそ 露沾
磬うけりてにを帰る道 沾徳
撫の系に我文集を書終り 芭蕉
茅よゆりてをまれさうつき 露荷
あけけの志のひ安記は有晴と 沾荷
琴城守よりおの葉 沾蓬

鳥城下りて野後やう秋城の 沾荷
九龍指とた尾上とるけり 露沾
風の音なきぬ襖袂のひさしく 沾蓬
火はあたる色の書 沾荷 芭蕉
ともしれく抱の輝とをまらひて 露沾
ひとくを簾紙編くしに書 沾荷
一軸の形への連歌集よと 露沾
名紙紙ぬき紙の残ひ 露沾
面うけを後よむく入男へよ 沾蓬
みるく風の目るあし振る聲 沾荷
懸織る花のふにたこのときうけて 芭蕉
柳のふれととらるる 筆
白紙別
わすさうしむうしうんあめり

落梅のそおのこくろる有 芭蕉
貝ひろひくろの破ふきて 嵐雪
酔ふこい人の肩にうつり 其角
夕の霞れいでねりえや銀文 蕉
根松苗放輝のなぐりて 子
池の橋にほしぬめぬ中つて 角
これし入帆のこゆるを根 雪
世の中成畫一の、ゆる茶の 子
味うかーらの産穢を 蕉
死念て入命の初のころ 雪
まゝ成占ごとく 国 朔 風 子
津の玉のふに、しとお賣と 蕉
二夜とすうのたふー侍 雪
一老の連歌成とむらに 子

秋元

苗代ももる雨とほろり 雪
雪の粟のいくつたに足違て 蕉
休宜下りさるるまのま 子
夕陽別
あつらぬい蛤とらせ雲夜の 蕉
一羽さうふ、千もろ一 群
枯るまふよふくねのふりこ 曾良
田中の道の通うくれり 夜々
舟細く己ろ家ーのれま馬 近春
秋風のりる門のはしー 水車
露の糸糸とこほと接の音 風泉
あふはっせー三葉のまこせ 夕暮
後まろく女あふーの清けこ 芭蕉
竹葉うけかかーに陽の 筆

夕陽る

明也くは後くくはひの光

李白

大龍の葉は後松はくく 芭蕉

ね風よそよしたる 野松の影 漢石

潮まはらした温泉の山吹花 工齋

待一つ三つよかきよらたの声 其角

高の縄目もゆるされ み 卜千

経子ともいたはる 蝶の影 風雲

餅二つさくは 藤のうしろ 白

名原の土境よ子月ね松葉ん 蕉

怪うぬし有て餅とる 宮石

妙不

そを松を思つてまはるやんたのり 其角

續虚栗

十月十日鶴亭會

芭蕉

後人と我るしるまてくの時雨

中くはく人そ松若くふして 由之

鷓鴣のくくろはとこれのよれに 其角

根瓜かたる 山陰の 鶯 松風

かけあつくま生れ露のひかり 文麟

新らしき舞臺力にさくや 仙伏

中の秋画工一はれ帰るこ 魚児

鯨こりしておろる 漢 船 観水

沖板中流舟にひくは波のみな 全峯

齡と母成しれ君さる松 嵐雲

酒のそにさくはまきのぬらひあて 拙筆

卯月の雲を捲るはくく 蕉

舞はる袖はくくろり早瀬川之
岸一面よのころ橋 杭 角
及まゝの里なきや孤かなし
舟はやふらう人間流の龍人 鱗
鳥影とく白ひも影あつて
たもこぬこいぬ流し傀 櫻 峰
途沖おたてる車は風を巻て
沖こく船にたされし 雁 之
花ちよよ名のはく浪を砕けり
あつてく 岸はうつれ春草 白
須の岸もくくつたその介に入 水
萱のぬけりけ雪は焼 家 化
老け文の徑もふれよ好まざる 之
若 流とれしあとの実空 嵐

星

雨音の丁酒のねがひそへつ、 白
命はたもへ船よはてし 鱗 角
船出ては水は冷く人海のたこ 雲
あつてぬ 岸寺はたのいも 羽 水
暮やるふむ板の目ねしはれ 峰
小畑さしいしと素山子伴ん 風
まけらの馬は酒債にたされ 雀
ほの見える星は珠にぞしある 白
蕙のまわり面白くゆきをみ 化
幟ささしと氏の天 王 角
舟牧野の笛吹ふら童声 峰
傍くるるわく腰にたれ 風
りてくしとまはれ子昂と時て 角
標のよした蜀瓜あつて 雪

隈も「あや」号居まね交かん
水
花よ出て海苔すらくし
谷原き日うし
声きくられたるうし
之

三河吉田歌

おと焚こも掛あつるま

壬午掛

鳴ゆ本原業言亭
をき井神字の君
こ徳たすりたる

系まこいゆの中
ふもまろくは海
小路ふりたやうに
酒気さむれい
引捨し琵琶の囊
僕いおくれ
ふらつら
明日の命の飯
わくり
種い
ふらつら
か
身よ

物なきかよふこととたむ有る佳
揚技とやう入の力ありそひ
小蛇とて死の風をかきくは
ころふの、指の子瓜をとり
ふれ年がたうてせしや、この
父のいくとと起やりの夏
お陰よとこころまうる波の声
翅とぬるふ、一はひひ言
まつ、ふる、飛の羽をたきて
三交ほした、物のかつけ
山ち、車又削る木が居ひ
極ふらして思ひあきらく
流は流し行ぬ法の朝嵐
揺るくふ、書と草切、
笑

殿やれて力いひ、これおれ
む、い、極、こころ、い、い、を、獲
ふ、い、り、し、指、の、く、う、け、り、辰
陳、の、り、屋、よ、を、い、つ、る、を、信
ふ、文、に、よ、と、う、ぬ、せ、る、雨、れ、柳、風
そ、い、た、ま、け、ふ、ん、鳴、り、け、足
くれ、盛り、文、が、あ、つ、ら、雲、雨、言
所、蛇、く、く、る、弁、恒、の、梅、華

よき掛

母後の後の後
望むいふのうら日

星崎の雲がたうてせしや、

おれ、く、の、よ、る、雲、の、煙、火、安、信
山のふくれと梅と極ふると、自笑

阿そり子權れまに逢は、知是
警のこま扱とま力ねおのこ 業言
累のこれこの世也音死風 如風
一里のさら母なる河川上よ 重辰
相とこいて門とこひこる言
市よ出てまりふんはゆえり足
半よ礼りみてまことそつて 信
初白のまきまぬら我ひひさ 風
方成ははーたり探貝の河 蕪
たり初よ甲成うけて秋の風 笑
かろ初とろ宇治の橋守 風
産能る西村谷のあそれとく 足
啄本多たたく杉の友枝 信
笑る元よ音鉤の時成まねる 辰

ふも産とまての産くけし 足
事探うらの真ふくる産氷 風
蕭ある眉孤化粧とる象 蕪
やろもたのみと養とく産の内 言
痛られぬるまはれあけりひ 風
累おくて配およとひまきまきん 信
庶子に懐く家つてあまの 足
式日の日わ物とぬとてんせく 風
後るまのまの川、口 辰
探下は願ふらうらうらま 蕪
堂探あ入り管中への執 笑
ろり月よ外里れ婚のり通 足
すはたのやうのく荆袖ひく 蕪
朝寄つてまの鶴の産あーん 辰

あはれぬかきらぬりうたしと
白人の庭園多ればはうり
伴興養むれのまじりきり
田とくことあつらひのちと
うたしのかよ種をかきり
信

雪の花

蕪田の社町院まうらね

芭蕉

塵世を後も清く雪の花
石くく庭のさむきあうらふ
あししの松並落る風やきて
我情帰る心のけりひ
秋くれて月あき墨れ一の家
杖よ雁ひし庭さひのめし
机をくちあひぬ雪と襟にけり
葉

平五

こけろく鬢の思き別方
あしころ後ぬをむぬあしと
破きし玉の境ちる庭
古畑まひしり生たうまうて
あし入声や世ろころし人
松竹よ飯着ひり秋の風
まじりしあき表まうら力
秋中あれさめくそまあふ
温泉のうさえて人こそさめ
け塚の女のむのふにたれ
たり泣ぬ城あるはくし
朝霧にくすれて候る鐘の声
あうく下る坂れあしりけ
水濁る里の汀あきしひて
蕉

あししふまつび刺のみ除葉
しり雲幾まをけし歌並り
物衣はゆくふたこそ言ふれ
軒さして経積取とまると
汝然こそ若のうられあうれ
おあむむねも何ふる遠近て
懸の聳のま目たる力業
あさ山の伏猪城若る声しよ
道一とちみ州分る萱業
優婆塞う所廟つむ文讀て
旅人起を扱いぬにきり
奠茶にぬれ茶いぬ寸雨の青業
水桶のゆる楢半とくまに
西行の詩よあぬ花されて

夏の袂は報うりかり葉

俣長吉吟の南の海の果として夏の
のけりうこそなるふとさう

春雪一ツまけてうれいらる

社おのるをうて

されいしとわれふよ 天竺草

鈴ふ

はららの氷ふとるふらるれ 社園

千鳥樹

いらつと啼けりうらふか
結のあをれをきく

鏡飯やいらこの言はくはれえん 無足

おとむりりし我足の 海 越人

ねをぬくかと思つ子日し 越人

いほつ鳥帽子の扱るる風 足

賤るちり馬の歩けぬあひさ
思ふに我の心はかほるおれ月人
千鳥掛

寂照庵くさげん 荷今

へくさ葉もれはと油も後し
旅の癖のそととアをりあうく
けさの月かゝる小笠原は報きて
御のねとくに野菊折る侍
千鳥掛

寂照庵くさげん 越人

蓮炭やこゝた橋とも思われす
雪かきてふすおをうくのね
海島の子鯨とほくる貝吹て
脊より垂れ端こけ 恒人

恒人

身よせ人け名月張わく小舟と足
苦蕎麦の貢賦通と 冨さ 兼
冬隠扇

くさげんくさげん 如風

りつゝくさげんくさげん 如風
清士の薪とよれる冬梅 芭蕉
所車の志とくさげんくさげん 安信
涉谷後よりついで中へ月 重長
矢中の声細き萩の風 自笑
かゝこのとくさげんくさげん 如足
雲野鳥のころと外はぬ建て 業三
妻のあつけいひよこつて 結
本綿撥きてぬ個よめじり 風
とくさげんくさげん 如風

きつし雲霞かて故郷の山雲し 笑
扱てる鶯の啼い（る見し由 兼
を衣履ひ藤袴よ冬けき返して 信
膝けし一軒の軒よもる力 辰
秋布ひびくこつにかたる客も 足
まじしまろくうのつ由 風
あれとて表意してあまの花信 信
渡そつるのまふつかうる 辰
采りりよそのれやまる朝すま 兼
山のまじしひとほむ葉つと 信
我急い岸城あつる一っ松 風
うとと名とせむるこつ波の青 笑
う入のこつと山の橋の深ふしに 足
琵琶よあられ松葉の秋のさる 言

色白れ有後の儂のころもきて 兼
あまに似るる雲あまみあけ 辰
抱引市代のけしとのうねひし 言
けいさまたる侍者の漢井 兼
貝けりしとる力けりけはく 辰
紅唇よやーあまの龜のやう虫 信
匂しとて体に掛たる葉りて 兼
母のいのちをとれせよと川 辰
羊鳴その囁のあさけらし 笑
外山の花れやうこまよさく 足
日ハ永く雨のまじしたる信 信
厂の名跡まほひくはのく 言

昨を十日毎名吉屋よりなす

いらんとす

松原にて一や字せれとて拵

扶実板とてさうり為す

歩行ゆりて拵つと板と馬掛

ぬら墨や孫の孫まづ年々暮

貞享五年 元禄改元

一日もぬういせし花の玉

風麦亭二白

疾立てす九日の世山くれ

あこくそのいーらば梅の香

山家又うふらべて炭のうり

ふたくものあういあーなめと

香又匂へるに不る思の梅花

是

うれまやまと陽炎の一二寸

下波の伝新大仏も懐旧

夫と又陽を高くもれく

怪ぬるの所庭こそ

はましのこたりひさす拵哉

つせりて

神垣らねむいもかけすねん係

神垣のうらら梅一本も邪

子良銀のうらら梅一本あり

卯子らみの一りとゆりし梅花

笑きた次拵の中う初さう

景清も花足のたよいせま清

純竹菴

花成君小はしり拵や廿日狂

徳之日

此程瓜花は礼りふけり

ついでついでと笑ふ

ある我とありと産み

道の傍とありと

万葉丸と名のる

われおまけうらに

乾坤無住日行三人

下はと揺るるる

去程よく我もせうと捨る

五

丹波市

草川て布つるころやふちれ花

初

美のねや、人ゆ、堂の隅

平



足跡よく借もえたり花の

五

無時

雲雀よりくへととらふ時

よー

花はうらひの日の朝

さうくの花のうへある

若水

春雨の本下ふつと

西河

本よりくと山吹うら

うら

花よあけり神の

高野

父母の志うらに

ふく花にささゆ 夏の院 五葉

和歌浦

河妻ふららけうらうらと遊村ら
ひとらぬいてりしるふ夜ぬ衣こ
よしお出て布子賣と衣こ

奈良

催佛の日ふうやれは小麻子

貞磨

後すけ巻の文とにふくやめ

は後とひつるわくうら

蝸牛角ふりこけよ次戸明石

ぬるお伯

情はふやんくれさあさあ

湖あ

三

五月雨ふかれぬものやせれ梅

ふみり又まうりうらとあて

ままにすうーつうら

おき人の小袖もいやや土用ふし

ふのうへうれく清るそぐれ 素

長良川賀巻成水樓

けあさう同にゆらゆられすけ

鶺鴒又又出て

ねもーろくくやうてせし鶺鴒
鶺鴒のつゝふ冊とほきてま
声あゝハ鶺も鳴らんうひ舟
何事のこととてふも似寸と日塔

秋の日

七月廿日竹葉軒吟

芭蕉

粟稗よとほしくもはらけ川の底

菽の中よりつる青 材 長虫

秋の雨がけ物こまきまかけて 荷

有ふと涙ぬきあがる山あひ 一井

ひたるーと人のやいひささよ 越人

芋束おとりにて屋根ちたえり 胡及

本の葉ちる抜のこも神無夜 氣彈

傳待うぬる此の空もの 蕉

遊きて故の鳴声は眠られず 虹

これよ物人や妻をかろへ 台

あはけをまきくも髪は冷し 井

死てるもかよふまあるあり 人

乙亥のらくしれ出る夜は 及

書

義成くむとて縁ぬ後ち 輝

穴うつしてほるそのこいけを 蕉

白きたもとのこゆる幽うた 井

雨乞いさかしくし花のうらひ 台

井 結るるる影の連と 虹

日和さよるる気おのかしら 兮

木馬走して子もまにたり 及

たまきこつたつつけてかき 彈

切籠おろりけ毒たぐられ 井

さやしの香うららるる方 人

人一代の急成るる人 蕉

控しそいこの恨も引ひし 虹

さたかくたれと顔も洗われ 人

懐も服差さしてすまはる 及

下戸をふくめる雪の夜の亭
早々の梅を我身にたたく
嫁せぬむもめみ眉かてゐる
志のひきまよさうれは写し
踏とやこせりおのこほし人
明やとれたを満をさう後立て
何れかひのほろこをやら
花より石の蓋ふおぬ
差くう出とくふのうこれ
はらしの月とて思はれん
送るはつおろつてこい木雪

文科の月二人よつてわたり
撥や命なごもむきうつ
雪とれておの月もさるんす
姨捨山
侍平姨ひりり泣月の友
はらしの月とて思はれん
善光寺
月うけや四門四宗もたつ
十六夜もゆく文科の夜
次といするは海方れれを卦
驥野
徐川の夜
夜うねもまつつにすまひを

派まひからく世にの 月 芭蕉
藤もつ 備後 雲屋 雲つん
理とくふれたる 秋の夕暮 人
瓢箪の大小 五石はうく
風よ吹きて 歸る市人 蕉
ふよとも 長安にこれ 名刺の記
暹の多きとくを 目の方 月 蕉
いそぐと 降乞のそに 立きて 蕉
ひくく 世話や 寺の 狂より 人
け里小右と 玄蕃 凡名 故 蕉
夏結もつ せぬ 雨の つけ 蕉 人
とぬく や け け け け 蕉
風ひき 終つ 夢の け 蕉 人
手もつ け 蕉 蕉 蕉

手出

ものいそく され 舟 路 蕉 人
力と花比良の高根と 蕉 人
雲蒼とく け 蕉 人
破さ戸の け 蕉 人
えせの 蕉 蕉 蕉
家おくて 服紗と 蕉 人
おれと 蕉 蕉 蕉 蕉
人 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉
初瀬よ 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉
月と 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉
相穂の 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉
あやふくに 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉
けの 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉
行方 蕉 蕉 蕉 蕉 蕉 人

きぬともまきく舞入居賦
秋の田代うしせぬ事此巻引て
さししげく文字同にまゐる
いりりく尾底の本葉居人
馳走もろ子の瘦てかひる人
花のころ漢葉多うもらる人
田小一を滄して腥き口
柱磨

苔翠亭

越人

舟出の行燈消さん煙まわれ
朝夕のうらみ紫雲のひよ人
吉翠
は君と名はつて井れあはれて
すけり行かうふのイロハあひよ
反古
南くら声は雨もつほくさる
夕暮

暮もれとのそく山のそよ刈の
赤くたく煙のうけれ淋し
女房もくれの田まき
簪とおくうらむる恋れ友
痛おさえてあうたは
やこ止ぬ雪の戸めを物さる
さし紗したる曲舞の章
秋風や子狐持とあまの表より
谷の庵のいこらした
り下は後まで一羽折る
仲よぬ足る敷盛の塚
庵人の衣中に花の影り
胸よて身よりふるまはる

鹿島紀行

白葉よらね鶴取らうしや 杉風
流うりたる稿と下はを根 越人
刀裁日海方ねふよ鏡縁しそ 芭蕉
まよ玉子とぬとむふとたり 苔翠
不つとらうとねとぞうしね雲片井 友五
もつ高きぬくも帯たとぬる 夕菊
御肉すそ急仏やと名とていれ 依々
泥若
たみちの火ふおとさるもまき言 人
瓦ひさし小衝ぬる 月 風
雪と何子ふ人と引とりて 翠
ろくへ負たる名品の貝 五
音のつ小あしの酒子やうらん 依
小蛇ぬれむらやなと産のいどぬり 風

辛六

後後の海泣ハ勢浦上る人さう人
英一ハ子の縁と睡 里て蕉
里を死花の本陰ふさふ焼 五
たはさく蝶のあまをさ入 菊

鄙懐紙

左柳亭

芭蕉

とやく笑け九月も近し春れ菊
くくろうれた川 育けのあ 左柳
新島玄氣れつしれ亭 五 路通
まらうとましと山のつこねり 文島
爾春の癖と陸まねめたり 哉人
ふ不ふりしるも文とねいと 知行
足の裏かて眠りぬとめたり 井口
年故問きてふと海被るぬ 此節

雲人のまゝにんやぬり舞 木因
けつり 雛又 精をこする 残香
どうくしを 灸とる 此どのうし出 曾良
書物の内の虫くらひ 於 斜嶺
飽果し 猿もいころ 悪し 一 桺
齒ぬけとふまの貝も吹れと 蕉
力をきく 既中 けつりてかふるく 鳥
ありつれりたる 夜のか 別口
一 捧又 けつりる 山花 咲て 通
陰とらひこむ 喜み 舞味 増人
萬葉のとうこは けつりいれしく 因
村とつれりたる 大よ 追ゆ 嶺
新すく けつりの 花の けつりさ 節
二代上りの 響ハ けつりりり 香

揚弓のユミするほとけり 良
鳥帽子のけつりぬ 娘も けつりて 行
冬ことも けつりもの けつりての大 雪よ 柳
茶のたて やうも 不 母内ふる 鳥
美しく 貞生れつ けつりさよ 人
厄よ 生へき けつりの きぬし 通
けつり 又 貞足とやら けつりて 蕉
萩とそ けつりたも けつり一 採の 萩 口
何事も 盆 けつり仕 けつりて けつり 節
追ふも 連ふさ けつりさよ 茶宮 良
丸腰よ けつりて けつり けつり 香
もの けつり けつりる 母の 尊と けつり 因
花の けつり けつり けつり けつり けつり 行
梅山 けつり けつり けつり けつり けつり 嶺

十二夜

本書のやせもやうなはらぬ後の方
行状書よりいさやうふと布やえ
所命後や納のやうか何五外
いそいそと雪をいそいそと
冬ももてまゝいそいそと

本曹の谷

生形うらむとつふ出るなむと
ほくけいふはふ寒き葉の 荒 岱水
代官のかてるにやの力とを 蒸
居風呂桶の湯をいそいそと
酢の糟をいそいそと
くふと狂人くくく次相談

色蒸

美

親の時をやうと一医者おるは
狂かゝりする様はくくく
香著れからうとくさるお前
様ううとあたる白 鷲 水
らと衣は馬ふもさる本曹谷
中箱の荒をいそいそと風年 水
ここもかまゝに漬てる湯く 松風
ほらねて玉一綱の雪けき 水
能らまて村はさる寺の酒 風
とけておとれふ強き疱瘡 水
初花の汐はるき春はき紙て 風
伊賀路のくくく山の裏も 水
徳橋集

松風

雪やちうとさる下なる路中すて

力の柄よ氷るまぬくし
唐からし本かきく物にきりて
秋までよる渦蓋の蠅
細しハ布子狐とどるま
所にて捨る腰の下
島守よま葉の孔とほく
わくくまはまの洞
白くくれ指し寺の林よ
髪切切ても身を作り
焼うとる物よのむし
貫ひよせしも茶に含ぬ
藪とくは縁ようれたつ
出家よは松きり上る
お局のいしむくつなり
良

半

取り軒の湯のさめてけり
とつたはまき揃よ
堀の物よ本ねく
益人のあつた
えは小田毎の目よ
伊達衣
陽炎の我肩ふたつ
水おろくふきり
拙っ屋よ獨住の
身いりそめよ
いさよいし

えは二年

えは小田毎の目よ

伊達衣

陽炎の我肩ふたつ
水おろくふきり
拙っ屋よ獨住の
身いりそめよ
いさよいし

くらみかくに お愛の秋 蕨
 萩原の露さぬれとも面衣い 蕨
 明らけ 井ふ 伏の 松明 山
 五月さし 小袖の 綿も 振る 寺 蕨
 落たる 髪 城と ね 揃へ け 良
 急ぐ れて とう 入 今 あり とも 色 山
 は かく 書き たる くの 優 いた 蕨
 盃 飲 こそ しく 火 燈 とも きて 良
 年 ち 考 ぬ くり 日 竹 つ と び 蕨
 と け ぎ も 夏 へ あり と こと 吹 け 嵐 山
 相 の とう た つ 具 陰 の 家 山
 猿 車 ぬ る ひ ち ち 八月 と 花 良
 浪 八 ち 寸 きの 不二 と 動 う け 蕨
 客 よ いて 夕 下 なく け い 難 蕨
 卒

大 又 遠 る く あ ち の む ち ち 良
 城 北 の そ つ 雲 暗 る 羨 ぬ だ 山
 記 て 火 狐 吹 く 種 つ け ら 毒 蕨
 け ち ち 迷 ひ 子 ね る 望 月 夜 蕨
 ら ん て 持 ち 世 へ 麻 登 る ぐ ち 山
 山 風 又 こと び ー ー なる 栗 の け 良
 黒 木 ぶ こと くる 谷 陰 の 小 屋 北 鯉
 た け 疑 ぐ 身 を ち ち ち ち ち ち 蕨
 あ け け の 百 合 又 洞 け け 蕨
 狼 の 息 こと ち ち ち ち ち ち 嵐 行
 水 の 志 念 又 井 他 け け 山
 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 蕨
 何 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち 蕨

膳も居れて鯛の漬、燻山
一門の志んころものさぬに
頼城つくる橋政の筋作

未来記

草巻に掛さく...
其角荒雪うり

雨のよみ拙さく...
あま訓一傑...
野屋敷の火縄もゆる...
ふのあま...
ま下に月毛の物...
風ひら...
傍輩に相撲の打...
帯はこ...
毎云...
角
雪
蕉
蕉
角
蕉
蕉
角

豆腐仕...
酒さ...
剥...
員...
見...
一...
日...
あ...
所...
寝...
提...
女...

蕉
雪
角
蕉
蕉
角
蕉
蕉
角
蕉
蕉
角
蕉
蕉
角

高田の萱花もやむく
夏まゝの霽の孫へぬき
たしむわ風のる高へま
よのふれ半よせり市角
白湖披雪路の田舎六天
どりふりと扱は月夜おほ
いほくとせりと晴のしら
糊たちた四手打着けり
とんどのひる男足才
つまはは戸城もかふる
みたりし汲んで井の門前
栗へよと未まぬ花の陰
三人とらふまれ月うし
雪

菓子を四よ芥子人形やり
枕の口や晴はる人おわ
嵐

杉風つる葉ゆる

車の戸もゆるゆる板を

鈴子

松しや名にあられたま
わしやわたりはふ二人
素堂

千あま

けしやもるる魚の眼は

日ま

あしやうとまき葉
柳まてくくろ勢ひは
郭まうとまき葉のう

雪丸け

多原家抄

芭蕉

秣負よ人を枝折のふれお

青柳を辰釜子狐こ月と推の紫 翠桃

ひくふに市のつゝを狐吹たて 曾良

町の中ゆく川をの力 イニ 蕉

雪のふか子に居れ イニ 挑

秋草はく惟子ハたそ イニ 良

ものいハ解子に血が イニ 蕉

ととれた髪のつれ イニ 廻輪

尋るに火狐焼付る家 イニ 良

盗人こころに二十六の里 挑

松の根よ茂松あへて年 イニ 蕉

雪うきかて連分 イニ 玩

本三

イニ 名所の 藤

伝くところ イニ 家 良

あけたも イニ 桃

と イニ 蕉

綿備の イニ 良

たの イニ 挑

日傘 イニ 蕉

衣 イニ 挑

酒の イニ 蕉

持人 イニ 良

倉 イニ 挑

森 イニ 蕉

月中 イニ 良

一 イニ 挑

乞食ともあらずして浮世の物産 楠
洞の地を極よこもるあり 明 桃
昔のまゝの猿の洞や澄つらん 蕉
流人葉前る秋風れ青里
らふもやうと朝日ぬおむる空 蕉
来とて死ちうは流の白浪 二守
翁の身れまゝとてこて翻り 良
奥の風雅ぬおよそつゝ 鳩
死し死に所ぬ花小田置て 秋鶴
死生ろれつるまの海月 思

まゝなちのまゝに併頂お尚の
山居の故より望撲の五人よ
あらぬまのしよむんころん

空

ちー雨なうりせいとせ
えなちひーまもあれた
木啄も菴にやふらぬるま木を
ころのにこりねむらなれて
空を撲よつるひとて向よ敷と
ほみ流るる折れ
因一ぬうあてこまろ折れ
白川集
お花ぬうとに紅葉のくれき部 曾

袋表紙

山家相長侍を遠亭
風流の何れやねれれ田植うと
千夜を魚子成おこ我やまけ州 等

芭蕉

水せけてる音のるや葉らん
聲よ 蘇サカの 声 出とあり 蕉
一葉して内ふ蓋れよ川柳 窮
凡雁よを振ふく村を秋より 良
然の女う上 弦念仏に葉と波て 蕉
せぬたのーやとととととととと 窮
或時、憚りも夏の入りぬらん 良
樟の小枝よ急が隙てく 蕉
うらとていぬらぬのちふく 窮
髪ふるふや白髪ねとうけ 良
酒壺の軍はさる戻よまて 蕉
秋とーるふとととととととと 窮
まらぬの聲つと破る麻の角 良
島の所伽の泣ふせる月 蕉

いらししのいのり 花に露がて 窮
かかーふみぬはかくよまは 良
ふもけ尾よねくよやむいん 蕉
せり揺るるる清水冷と死 窮
新ひく雪よ一とちれは有て 良
たのーく 武士のあまのり宿 蕉
巻ととぬおゆへ世に合は 窮
度よるまーうたを取し 良
よ指よ細れ腕ととー入て 蕉
何やう事のたらぬ七夕 窮
任うらる宿れうらぬ力かきと 良
とくたあうらむ六葉の髪 蕉
切志きみ技うらうら(挿歌) 窮
太山ほく足の声そとととと 良

淋しとや湯きつともまきくみはる
殺生るの下は——るの窮
花をたれたるにたれり孤尊に
酒のぬふひの醒るころ風蕉
六十の後了と人の睦月おれ
蚕飼とら家小油重ぬる良
伊達衣

赤門可仲の栗の木のうけにる
じとくつ栗くらふふの西のよ
ことして西方浄土の候とて行基
菩薩の一生はも標しはか用い
きつとらや

かくれやゆもたぬ花は影の栗
よれよほころけとぬるを州一栗齋
切り明と山の井の名い有されて等窮
群信ひとらんれね接曾良

やとせうらうら栗の葉とてこのこころ
あふねたらしま葉に有れ暮のて
イニ昔年の秋の候に
秋去つての後の候に
あつとらとたれ羽の鳥は乾かして
乾かば讀る曉の 声 蕉
松齒及木よ吹よけけり言 齋
酒の遠根ぬりよころおしし 窮
聲入の准よまてしつとら良
これて送もる傾極の各 雲
貧と孤神よとらしむる誌とよ 宇
力のひつとぬらとらとらる 蘭
括しては魚釣りがぬとら 窮
笠の煙はすすり産れとら 枯 齋
梅は出て初瀬や芽おとら 蕉
かたらの谷の転鼓をうとら 良

あろわしにまふきつゝもろを声
あむるこれぬ思登そくは
ゆゑ難成りつる年の長し九
かへ一々の膝やねもなき
うたゝ藤のまきうとたけしは
朴とかたりの市の生 醉 窮
行僧に三社の焼成いくにて
系合休てこぬいつの後 蘭
加ふるあろ崎鴨の舟とまとい 窮
四五日有力成えとら 養のを 齋
を二付てりいふと里れむ 松 雲
麻の音 経てあふりせぬ村 良
冠ともし海をとりつに 流るに 養
いふ文をこころにたのしみまて 文成りて 窮
うたゝうらひはくらくく

急とれい世ふととれ人ふく人 蘭
急もせれせし一あく一夜の及 齋
入りには四門は法の花の山 良
流しつれ成こむる遊生の宿 雲

きつりお里なるあまの物も

早苗のりまのこやむり 雲の物

流家のの什お成拜す

急もたりの五方にかこれ身懐

急も山の及祖神のいなり
くてもつて

急も山にけいんついのぬら

急も山のねせうせうせうは

翠白の松の影のいづれ
橋より松ハ一本と三カノ

松山

松ノ下や鶴の羽松の影と

三鏡

五ノ下や其のうらみのあし

弁花は兼房のうら白毛の影

五月雨のうらみのこゝろ光堂

尿前集

空の風をの扇とちぢると

尾花江流風亭

とくしきぬきつておぼろこ

信出よふのやう下の暮のこゝろ

さうらぎを供つておの影

本八

春の夕する人の右代のすゝくれ

五不古

宗とや思ふまゝ入坂の声

新名風流亭

あけ曇り空たつぬる柳の影

雪丸け

柳たつこの秋霜せきやれ樹

風流

らうめてかこる風の葉もの

柔作り嫩又蔭と折へて

雪之かゝは虹のものとを

さくろおる方に二千里隔たう

馬市多れと弱ひうせん

煤気たう父のうらみかた

葦

事くくろくして判成るゝむる 流
 梅さうじ三寸もやじに唐觀子 良
 こたも成よけて通と 燕 如柳
 三教さうじの後はよび思はれて 木端
 侍の青さくくも山の墓原 風
 雪さくくぬまにたのれさくくも
 新端さくくも端のほや
 へさくくも力成焼の小社さくく
 底あさくくもさくくもさくくも
 共ぬる花の今に衣ぬさくくも
 かけさくくもさくくもさくくも
 たのさくくも茶ぬ換せるさくくも
 果さくくも悪よから死さくくもやき
 油香炉さくくもさくくもさくくも
 風 鶴 流 良 養 端 松 蕪 柳 風 木端 如柳

卒九

ほとんどの常風やのりさくく 折
 花傍のいて小盃けりえんと 蕪
 武士さくくたれいる東西の門 良
 たのさくくも麻もがくもさくくも
 ね織よほさくくも草朽の力 流
 秋さくくもさくくもさくくもさくくも
 さくくもさくくもさくくもさくくも
 さくくもさくくもさくくもさくくも
 所味の振よさくくもさくくもさくくも
 奉る供所のゆりれさくくもさくくも
 よさくくもさくくもさくくもさくくも
 ほさくくもさくくもさくくもさくくも
 さくくもさくくもさくくもさくくも
 さくくもさくくもさくくもさくくも
 流 蕪 端 風 流 蕪 柳 風 流 蕪 柳 風

うらひとく^いなり 故郷^い宿^い良
雪丸^いけ

大石田高野平たは亭

芭蕉

五月雨^いあつきて早し^い上川
峯^いの虫^いはつちく^い船^い 杭^い一^い采^い
凡^い畑^いいさ^いふ^いそ^いの^い新^いき^いら^いて^い 雨^い良^い
里^いと^いひ^いく^い入^いの^い葉^いの^い細^い道^い 川^い水^い
年^いの^い子^いに^いく^いら^いお^いく^いさ^いび^い夕^い方^い書^い 采^い
雨^いを^い重^い一^い懐^いの^い 吟^い蕉^い
侘^い多^い成^いち^いら^いに^いあ^いて^いひ^いら^いし^い 水^い
お^いひ^いと^いひ^いら^いく^い岡^いの^い境^い 目^い良^い
永^い樂^いの^いふ^いら^いた^い寺^いに^い成^い載^いて^い 蕉^い
夏^いと^い合^いと^いる^い大^い尊^いの^い低^い 采^い
狂^いお^いの^い香^い哉^いあ^いら^いう^いこと^いを^いた^いら^い 良^い
判

凡^いに^いく^いつ^いる^い双^いお^いの^い石^い 水^い
捲^い上^いる^いを^いさ^いれ^い見^いの^いま^いを^い 采^い
わ^いつ^いふ^い人^いの^い告^いる^い秋^い風^い 蕉^い
水^い邊^いを^い井^いの^いた^いり^いと^い表^いれ^い 水^い
ま^いめ^いて^い折^いい^いと^いま^いら^いと^いま^いを^い 良^い
花^いの^い後^いを^い成^い職^いと^いる^い花^い邊^い 采^い
杯^いを^いん^いい^いと^いあ^いひ^い山^い陰^いの^い塔^い 水^い
様^い多^い村^いの^い後^いに^いお^いの^いま^いを^い 蕉^い
カ^いウ^いウ^いと^いる^い甲^い斐^いの^い一^い乳^い 良^い
む^いら^いく^い垣^い入^いり^い通^いら^いぬ^い岸^いの^い心^い 水^い
も^いの^いな^いた^いひ^いと^い削^いら^いぬ^い木^い 采^い
星^いを^いる^い怒^いり^いま^いら^いに^い折^いら^いる^い 良^い
集^いの^い遊^い女^いの^い名^い哉^いと^いむ^い力^い 蕉^い
兼^い笛^いふ^いと^いう^いて^いね^いし^い垂^い豆^い哉^い 采^い

柴賣の生一葉路のささぎ
 合殿の嘆本陸とをわがうひよ
 たえくつらうはあ日れ征
 古々のなうと詠成さうさう
 去葉海さうのふのふ合
 雪のこれ作て市の名跡と
 殊挿の目成さるの客
 ふれ人とちと懐紙ふさふれ
 ちりり鳥のまう入相
 平流くとつ日の越つて
 山田の種とくくあしつ雨
 良 蕉 水 采 水 良 蕉 水

花摘

有うとや宮公のさうの風の音
六月四日羽黒山本坊より
ふいて呉り
 芭蕉

任不の人のむら夏草一
 川舟の浪よ重載引立て
 移のさあふとよえちうさ
 澄水よ天のうさうさ
 さたも南の布うちうり
 ぬらうさのさうの陰さうさ
 百里の橋を故さうの本返
 山はくはるさうに城の記とさ
 芥持とくむ神一本の森
 ちうさうの記とさうのさう
 登うとぬあふ何とれく鬼
 左所とさうのさうのさう
 糸よさ枝よさうのさう
 力えよと引起されく愧れ

繁みよらとら羅の、田 蕉
が、河とるく大のかじに花折て 丸
的場のと清く又暖う山吹 雪
春松経一七のうれ力る 蕉
汲ていたく醒井の水 丸
足成のこしとすても接り 蕉 円入
敵の門は二枚扉より 良
かき消る夏の時中の地蔵を 丸
妻ととらう山犬の 声 蕉
くは雪の椽のうれまのよきく 水
温泉の香よ思うう柳舟 丸
籠の青紙持寄ふと別て 雪
とらけけしはるおとらけ 法 入
力の心ありの風と骨に 良
圭

銀治の火砂と指書の乾 水
あうら相よえけしん 丸
鳴子おしろうく行 藪の窓 雪
盗人よはまそふ妹の身を 蕉
いのりもつとぬまくの 井 良
空のさうれ小流を 善 浪 會 堂
音希よ上る乙子の 舞 水
とくしとや不の三日 蕉 遠
かきこれぬ湯屋にぬる 蕉 井
陽屋山おふむ及の洞う 蕉 良

初菰集

崔園重行尊

あつしやんは出遊の初なる

巻

陣の車の音はとらふ丹行

信濃の暮はとかりて後打こ

国跡生の末の二日力丸

我輩よあつたつたる孫打た

能成故城と付し内うつた

山の塔よととととて帆が紅丸

藤ふふと里いふとふらに長

栗桿以日毎の舟小食飽て

うけちつとつた新なるんれ行

あつた母の記念ふ拙なれ良

雀よのこん小田の前そめ丸

は秋も門の板とて歳はり行

赦免よとてれて掲えり力丸

良

とぬしに扱ふもほし寺籠丸

宥の女れぬよものりり良

婿入のつたえり馬にうち勝て

もとの藤い畑よ焼け丸

金銀のまし一步小改り丸

素良の都へ豆腐初る行

は雲よとととととを金揚て

藤巻ふつとの化粧うらり丸

遙けさ月城位後と流葉丸

とよしに女はくとせて良

千日の菴はひとと小ね愿行

蝸牛の壳と踏はふに青丸

身い城のらふととととと足

こけてあけと女島ととと行

めくろる方成り祈の空に足て
温泉かそく入る陸奥の秋風
和ノのけううたの氷の極
山くれ能る宮の青
あま衣男にきさるる
りかき入るさ歌のつと格
花の咲鳴しやうふまを
数よくのりしきや山ひこ
らつこ

出羽酒田伊東不玉亭

あはみ山や吹浦うけてく涼
海松うら破またくむ帆遠
舟出ハ岸を伏せり人酒もち
民の鼈のけふら秋風
不玉
曾良
良

あろくき握ひりたる色栢玉
あらし色の玉成ふるく入る裏岸
多冠能る新釣の右に冬ぬきて
火成焚く新よ白髪を金
海道ハたもふたまで切せり良
松多れくる武隈の土産
草花がうーた亭はあひて玉
ちうこの針よねるあひと良
衣供して高かき我もあひん
けせれ末よりうーた亭入玉
朝つとえき帯ちれ鏡の声良
々入も命と語のこ食
あろくう花と雲あとき更折て玉
ねほられ媽の無山の力良

色はいにい本魂よむくまの風 煮
とうこい流ふとちう山 飛玉
劉カッけらよはきたる並侍ひ良
権おあさむる塚の 荒玉 玉
くひ家おとせぬと思と頼らん 煮
是比才衣か縫くそさく 良
明日きらん雁か俵よ生屋て 玉
力さへまよと陳中の市 煮
肝薬いよさ島の奥はとー入 良
小神様と送る戒の師 玉
赤良の母ふ似たると床しと 煮
を衣にいさくぬ家いこれとも 良
赤良の京持つこたる古今集 玉
花と封切る坊の酒 為 煮

玉

常れ果敢まをむる羽まひ 良
蚕種動かさて帯ふに取 玉
にいた本公化りてぬらさるえん 煮
ことかきこむ城このむ言達 良

聖丸け

六月十五日寺嶋彦分亭

色煮

とくしとや海よくうなる上川
方公ゆりふ浪の波海查 今道
黒野のねいりい屋の室のりて 不玉
蘇い両よからんまきされ 定連
梳とちれ折あはれと市公侍 興
新よ留らとらあはれあつた 仁林
不接理のこらにえれえ衣 庭

春の雨や西籠うわりの花
はたかや鶴返ぬまて海すし
象河や料院らうふ神一ふ
海土のぬやを板さかむらう急
曾良
依良
横たふ二つの川
曾良

車江津よそ

又月や六日とつねの板ふ似守
左柳
柳亭よ飯焚くううまふて
曾良
鶯のふゆのとせよる強
眠鴉
のここと常じうよとひんせせ
此竹

松のるよりほく供 徒 布囊
夕つじ庭ぬえらふるれ葉 石雲
たつひをを終りけり 水筆
おとひうけぬ負紙傳ふ急一つ 栗
とぬしの場紙記もあつに 良
救しのうしつみれ品の指うきて 養
鏡よりほる我らうしひいり白 蕉
かこれと初春は力れは病死 栗
麻引て来る大のふくさよ 雪
唇うつととさ知らぬ雲 衣
た川と武人のふかの菴 栗
花の冷其やうられて星かまふ 宇
蝶の羽をい桶燭のうけ 雲
春雨は髪割る夏のおふかか 養

香いしろしに人ししの文

星今宵昨は約きてとほし 右

と考へし一と初刈の稲曾
瀑水涌よいそく布流きて

種植て小枝よ花の名紙 右

ふのしりりマの目ハ長家あり

糞成密雪車もたじけ雪上

一ひら鳥人ふきて 右

金山中伴て小砂城拾うん

科のむし一紙臨陰の座也

うれたこの百首に奥の名とま

人のそりー一紙年れきうれ 長

十七

ねりーハ着てしりしの音 右

み紙射させくる枝の床蕉

被り老の枝成ぬる現水 右

住昔の力山又同たし 右

核皮むく老のかーらけ秋を

時ふきてふれううれ牛乳を

塩漬の孤村のううりき 右

後あれふれま流し 右

かふれー地元の縁よふて

後成おろせる里の物 右

俗借成ふつひて花のまに入

才木成とりぬく梅のひと生 右

幾後の新雪の花の 右

さうさうに家へ

ひとつあまた女もあつち我

あつちに入ると

己せのふやふ入るに有波海

一笑の海

懐もうこけ我後身ハ秋の風

女紅菴

砂累者さうさうに秋紅菴子

芭蕉

さうさうさうさうに秋の日の新 一泉

たよりも引世の末さうさうに 左化

遠馬さうさうに村の生垣 ノ松

秋波治の心成さうさうに 竹意

小桶の清水むさうさうに 悟子

手八

さうさう生長せしも映れん 雲口

鳥放ちやるにの栗原 乙州

祓り人さうさう通ある心 如柳

さうさう消ゆさうさうに 北枝

肌をさうさうさうさうに 曾良

さうさうさうさうに 流志

二ッ屋さうさうに 泉

さうさうさうさうに 蕉

糸さうさうに 枝

あつちさうさうに 口

さうさうの花さうさうに 浪

知らぬさうさうに 巨

あつちさうさうに 秋風

印の字

歡生亭

長

ぬまてり人なれり 千石の萩
 蔭うられぬすし 死ふく家
 月又とて 籠もも 出と 船上て
 千ぬつとひく 城納めめく
 松の 風堂 蔭の 養れいさめ
 興ふつへて 馬の 一ひれ
 日成 徑くろ 湯本 の 夢も 出あ
 下戸 又も せせて きた 酒持
 紫の 古れ 鍛も ちと ねたり
 互の 地 系 又 松うくと 中
 吹 狂 又 鳥 の 声 も 了 交り

長

享子
 曾良
 北枝
 二蟾
 志格
 斧下
 塵土
 李蓮
 祝三
 夕市

秋成とくひる 穿雲の 紅 蕨
 肌の 衣女 の つとり と せり 格
 ろとぬとせりて 我うつ 蛆
 ようかゝる 本より 出ぬ 聲 枝
 雷あつた 塔の ふれ 日 良
 昔よとめい 舟れん くらも 只也 子
 胡琴こさゆる 袂の 袖より 邑
 おもとろうと 虫い 声れら ぬ 市
 ひうを 急る 刀れ 巾 陵 卜
 そあり かり 花 又 葉 け 々 込 地 生
 籬うる 雙 道 たつ 〇 夕 三

燕歌仙

北枝

馬うりて 燕ふひり ぶる

くふれいこころの曲りめ 曾良
力よーと角力小橋流ぬれて 芭蕉
鞘くーとーとやうてゐけり 枝
青閑な旅のたむ水の音 良
柴刈こころの草の並道 蕉
雲ふらひこころの心は愛時寺 枝
於女に五人田舎こころの 良
為かまよ思ひき思ふもつて 蕉
髪ハ判らぬと魚喰ぬえ 枝
蓮の糸とるも中し罪作と 良
先祖の負債はとれたる門 蕉
有内のさうれ上たこころに 枝
赤き山をらぬ桶の弓竹 良
あそ風はものえぬこれ細毛 蕉

今

志ろと蛙のほく葬れ 枝
花の香はたき都の町造り 良
まはのこせるま仍の箱 蕉
毛束さやまから新波の貝 枝
根の小鍋を出し芥や地 良
まよらうし志とねのほろあまひ 蕉
笑しれとのそく夜 西 枝
法と小紐蓋あ賣の古風 蕉
那花人ふる人の柔島 枝
暗ふとつこ意に居る淋さよ 枝
あはれまほろるこ月力の板 枝
初巻ん草叶花と修りしと 蕉
小いこもちつく伊勢此神風 枝
虎瘡の素名目承ととやうと 枝

あふれり批把つらるこ
ほそ長ふ仙女の姿たどやうに
あふぬをくほる水の白波
伸張る宇治のけしとあはれ
寺よ伎をとたけり口上
舞つとて花かん花もあふなり
酸ね人とやふいさなり
菽の松

一法り又いさる菽の松の那
むのつひも成落縁の下
紙まもむく入あふりあはれ
いしにたえむきれあはれ
極本花の樹末の軒かむけり人
食のとうやあふ事ハおほえり

菊夕 白之 残夜 芭蕉 曹良 路通 兼 枝

肌ぬきて人おえせらる夕向の夕
兜さくけり守時のわたりし
たさあのりうりに條破雲屋
ほそねあふりて扱菜うひ入
舞よ花ももろく鳴よまきり
有えあひりし後のお表末
ささりしの貝拾へる布ふ云
枕掛繪はかく極の衣さ
さぬしれ尻目に種と眠る
あふ恒根ふふやふもかけ
豆腐ひくさるさやぬ御の祀
るの菓さうしと任あふ菴
たささやあふり兜もたて
あふしにさるやあはれ

夕 通 良 木 夜 之 通 燕 通 因 夜 之 兼 蕙 夕 良

夜
はたよらうねにまつむかしの
けこらまにたかきくもたなる
みまてたのむたうけかえ研
様うたひにおひまぬる
言さの無野をのりあし
まもつうう人よ絶す
田と穿つてゆひくもかき
大吼うる森の入り口
ゆふあか夜はくしるは
そらしく定ま秋の夜や
谷越よ新酒香とよるあり
くや辻堂のうらね棟上
うらむれて夜病送る朝け
まひかけて一むけは
蕉

夜
をどあて近うさくこれ
胡漕くくく 五 の 新 華

左田の神社を全堂の甲
後れさし成えて

むらんやれ甲のふれさうす

山中温泉

山中やうきくそぬ漫の白ひ

幸くかかぬ成つは

松の木れそまきしはふ秋の風

るるまよるうら

今日よりやま付清く人をまの
ゆきしてたうれおも秋の系

曾良

全馬寺

夜
を掃て出るや寺よまぬやね

よきすめし 秋風さくやう丹山 晋更

水枝のふよ

悲しく扇ひささく余波くれ

幸子此社

有清し ぬけのもてるかの上

名月やふふ日わ定めなうら

種つ碑

月いつと種いしつらる海の底

如水子世

花居て木のこ草花を捨て命

本因亭

かくれ家や方 二葉とに田と反

如行亭

やせあつらふれふふ葉はつらふ

千鳥掛

あまのつ才の秋電伝書す

くま

うささやや雀うらうらふ脊戸の粟

藤よえある形葉 刈 萱 薔

なげ伝を畑の編摺きあて 安信

風は煙より方のつけほの 養

枚垣のちあいにをた鳩声 足

くつあふりて紙子打つく 倍

いせの辻まおんとて

恰の二見よつくれゆく秋と

そらさうらわれ押あひぬ赤ま

長尾時

如時雨様も小々の秋風ゆへ

多胡碑集

いこ子もけしきつる人玉雲

お花よきまにけりた水仙

羽帯の風やむねよ軸まて

唇をひらくむ力の換途

麻の声と養のかりよけ表る

さくくある字のとん栗

雑政のやふまをよ打とれ

まの食らちの蝶のうるさ

左ねうり慶斗は侘る海うま

はつれ多をけよるのま松

多紙志のひしよけよみて

芭蕉

良玉

指風

之園

古芽

半残

品

蕉

固

風

残

傳もろくてもや列さくろり

馬の青傍まをのとりし小蕉

力入くふふ不二のつとれ

秋うせの産ふるいせよ出て

蕭ふとりりる菽のよ雀園

庵とされいせやにぬる花の並

羽織とろりくまの糸よ

激きて耕と肩とらやとりの

首の元たの頼朝の雀園

お雲よまふり下れお出づり

まふまふり奥居の客品

昔は「あつり年格安ふはこつれ

林とられよ松よ葉の戸

痛る時も馴まの安にけけ音

芳

品

風雅仕上り渡のこけり子
世の中ハ機屋界ちる流衣
こけりるるれハ俳切たこ
猶曉煙ハ月流ぬりしこ
僧の密刺る色ノ夕暮
ふふふハかみちとこ踏交て
巻うらまこ時ハ烟しる
生れ来て煙草のふもる氣樂
志ハ繁かうらぬおふりて
左義長のちうこけりては
かつらり雪よたさつる
全扉の松のちひやさるり

あつらふ

おきやいつ大佛のけり

後酒堂

浪衣津や田すれりて

まいしうられりる人

るくさめて

芝いしく梅とんのまこり

落柿舎と

中書りつ登もゆるう

帯来せふ似てよせん

何よこれ竹をの市にゆく鳥

元禄二年

薦然とる人ゆく

三とぬ

後を産のたつもの

あふくや花すくはる捨置 園

二の目景おみくつて

くわられうしんは花も道雲

俳諧集

太神宮法樂

らの木の花もさうしん自うれ

声よ朝日成合むうらひ寸

まらうらた葉の橋ち重く記て

二葉の莖所幸訪り

有叶の子紙と指よりうみ

條足とふたたおのあやう火

物り掃り、風のかよきあて

門細めふる田の中此寺

と景

益光

又玄

雲菴

勝延

清里

光

蕉

全

と踏来て清水されあ油汗 菴

かへ響かたのい悲——き 玄

かのとたれ御館の破とこれ 蕉

甚よ付つとて洞落——つ 延

いぬつては酒とふらぬお思 野人

床のわら屋よ傍のこりりて 光

去らきらにのほきと存をあつじ 里

はしめてほるる圃の初稻 志

漏る力城跡ら機織る家にと 玄

藍の——みつく指うくこしん 志

神役は雀をよまぬる澄連符 光

返寄ふはするこぬの情 人

息まよ沈のちやめ枝おらぬて 延

水鶴と追よ記—— 曉 玄

多葉務吸し一毎の終に燈りる 港
惟りふあそをわうらうらと 里
あつらふの樂の一ひ成種えて 蕙
狗りの玉子の浦はさひたり 光
声なき舞臺の張る秋の燈 玄
あつらふ風は銀杏吹ちる 巡
あうけておぬれ力成るまじり 人
くろもささむまは舞臺の光 港
親いらい葉より水と流るる 光
まうらふは成葉より代ふす 蕙
い坊成はくささるまじり 正木
ゆりこし權より葉成るる 玄
まのめれら法よと引挽の 巫
程冊のこを神難の昏 人

一幅半

芭蕉

紙衣のぬるもわらひ由れ 乙孝
こころまじり波のふまぬら 一有
酒賣らぬとけ挿し障子 杜園
板屋ののすゝふふふ 雁守
ゆへ暮の方まで傘以下 高森
馬よ西風はけりてり 高森
。付未芭蕉翁の句のむけり
箱書のはうてまねい号は授て
世中のこころは行けどしく 蕙
ゆへはよとやとかる 神人
命ととらふの連歌を懐ゆ
汐八子てぬる文とく頂高浦

目あしに替る茶城高ひて
乞食年々橋の本れ中
聖しく丸雲かゝれどもこつ

厨幕のけしきに後詩が紙
八つふろ子の紙掛けぬ

湯を中茶胡のふれす

花垣の底いそひなみの
やうくうの程うけられ
たうとひほつらぬれ

一里ハこれ花吉の子孫

六

ふとひいおれこえつ花さうり 去来

中産中の中拍子やたの声
惟くよとさけいねしろし声

高ゆるいりいれい塚のすしれ茶

巴う先 くら

種芋や花のさうり松葉ありく
火燧ふさけハ風こころあり 半残
酒好のかしらと後いれええと 土芳
ぬたえうと死年の衣 良品
有明の七つ執ある茶院又 残
ひとこのれと附こころうり 蕉
いら風は枝のたこちる 藤合 品

小信の癖は口くこへとら 芳
やとくと矢洲のほろけの冷 蕉
多賀の杓子もつりものさる 残
手松のともとも持こそ三橋組 芳
人よとりはく甚名にをし 品
萱州のともかりぬえとて 残
秋たけの蝉の啼死ふりり 蕉
力くもてるを根まら風音 品
こ月もて青た藍瓶のあ 芳
にさうけの花れを像はほもて 蕉
後のはり来る水のうりり 残
猫れ眼の六ッ枝核に四ッ香ク 芳
あとのともふひの鐵蘿蔔と切 品
かうともも病人あれの借とぬと 残

たぐさくやいて出る髪結ひ 蕉
さうくくは津屋の形松取ちし 品
冬至の裏はお思ひま次 若
化粧もよよとくも思つては 蕉
まさこそ後のはしふりり 残
朝ぐなはれひのまき膳まつ 芳
いとあられからみとえれら 品
田鼠の指喰ひあはれ方流て 残
風ひえそむる午の子れ後 蕉
露一これ紙のされをりはむ 品
死とも人の竹よ来るべき 芳
外風や吹起されてかいきぬ 蕉
筆がたあせの鳥鳴出す 残
きりくとひとの花は指むひ 芳

書系よ直の大鞆うちろり 品
つこ

花見

本れもとふけい給もはらう邦

芭蕉

西月のとこふ旅天まこ 珎碩

総人の風つれりま書て 曲水

く死もあうはぬを刀の鞘 蕉

力まらて假の内裏の司石 碩

叔白はくる拙りるをこと 水

鞍並るこ乗駒は秋のまで 蕉

名いさふくにほり替る雨 碩

入り込は後傍の涌湯めぐる暮 水

中もせいのみえん伏 蕉

つるみ成産一方は肩けり 碩

日そ花筋より急はつらつ 水

おねもよ身小抱冷てまられて 蕉

力える奥の袖おもと 碩

秋風の船とこはるふまれ音 水

下りくまや白子若松 蕉

千級よむ花の雪うの一方田 碩

巡礼死ぬる道はけり 水

何よりも嫌はつそはれ 蕉

みかくはとの力とくかま 碩

羅よ月城いとくあ 水

懸燈つるつれとほはひ 蕉

手来ら紀の愛ちり 碩

酒てまけらるいこぬめ 水

双の月とのそくまき 蕉

わりの持佛よむり人急仏 碩
中しくは古岡小居北の雪もふ 水
我名ハ里のふりりものく 蕉
ふくすしていぬ痛の肝と葉 碩
石板しくは明らるる 水
花とくはたすり振らる振て 蕉
たく四方たがるまを庵のあ 碩
一費の修むつうとるり 水
医者の業ハ飲ぬるふら 蕉
うれ咲ハ芳時けり成久也 水
地よとくあまれ山中 碩

虫見

本らるるや新に解してま来ふ

雪のむち子もはなはな 九七

幻位庵入る

えたのむ推れ本もありま本立
ほくよは北岸中をちりふり 曲翠
暈とく入るの上も苔の 乙州
うきも胡もつる花の死

信不ゆく人よ

那のちつうとてまは 微因
くつとりの泣きつるまの山 野水
海心よ五方ふりや一らと 九七
新道地岩梨をる外猿れ 干那
細粒のちとらふや 女の心 酒堂
那とて水 ぬ水のこころ 犬堂
とくしとやとも小糸を推か 如行

紙牒とちうて

おもひかへて懐ふりけとちうて 野往

友の粉とちうて

一袋くればちうて田のこゝま 之儀

をうて

きうておぬけしぬいさぬはけしぬ

俳諧集

大津奇香亭

芭蕉

ひろくしのらゝお眠るをるか

せりて涼しけき青 奇香

らひ力の氣を染にたうして 尚白

ふよいとこのしるひくあり 自笑

松の木成秋風さそくおしぬ 通雪

松成りかゝて琴の糸よの 松潤

うかれらる女ふれて目の積る 香

矢ねえ雀のよりの急くと 蕉

らる塚よたこの文成後ゆき 笑

物の雲しるるをかゝし 雲

中し言ぬせんより出て雲る 眞琴

浮世の弁れ清ちる寺 白

ありし吹きさるととる方ニ 洞

杖を携よ麓の道の 江山

箱毒にぬく社拜まれて 蕉

横しぬけ方の汗を流る 笑

花成りて老花はるる海の色 白

雨よ肥たる山峯のこころし 香

まぬよ雪さすのこころし 雪

さられたる哀よ私の音は山
 この一木の幽よとて松の枝
 出よとてとてとてとてとて
 友心のうつて悲しんば悲し
 追りてとて麻の子とてとて
 中の秋風緑あふとてとて
 三徳あつてとてとてとて
 うとて人ととてとてとて
 大智あつてとてとてとて
 一糸や二糸はとてとてとて
 貴の子とてとてとてとて
 こつとてとてとてとてとて
 齒牙はとてとてとてとて
 酸欠の伯父の息とてとて

山 香
 官江 香
 一龍 香
 蕉 香
 雲 香
 白 香
 洞 香
 白 香
 江 香
 雪 香
 香 香

波の味ろ子成差小来る 龍
 機くむまき戸小花の香とて 香
 くれまゝくくくくくくくく 白

俳諧集

まく髪ぬく梳の下とてとて 芭蕉
 入日成とくは西窓の力 之道
 あま塩の彌うとてとてとて 珍碩
 前とてとてとてとてとて 蕉
 何風ふ牛の袋のわくしと 道
 妻の小うしひ成たてとてとて 碩
 無とて一ひまとてとてとて 蕉
 願はとてとてとてとて 道
 とてとてとてとてとてとて 碩
 えとてとてとてとてとて 蕉

山云事の情の明る幼道
かふと谷より踊るなり
力教は実の若毛紙退うけて
細もさつとも端さつとも
このふとも布子一二枚の重たき
すこもゆまのぬいばる
附しく小糸もにさつめ
道 道 道 道 道 道
道 道 道 道 道 道

合款の本の意くもいふ
草の戸をまねや穂を
拍の本よ勢鳴かた
おろろろおろろ
おろろろおろろ

笠田

病丁の杖をたてて
延命の丸の小波を
附る中田のつら
木枯す類くれい

智内亭

おろの丸の杖や
外雪のふりこ
其角
其角
其角

後養

さつねおろろ

去来

一吹風の本の草花川中へ付 芭蕉
 股引の袖へ倚り川紙て 凡北
 たぬき成怖と藤張の弓 央部
 ゆつらるる草花うらまはれ力 蕉
 人よもこれとるあめ 来
 書ふらるる草花うらまはれ 邦
 とゆつらるる草花うらまはれ 北
 何事とも云ふのうらまはれ 来
 里んんんんんんんんんんんん 蕉
 はほもつらるる草花うらまはれ 北
 芙蓉の花のうらまはれ 邦
 及おのうらまはれとるあめ 蕉
 乙里あまの道のうらまはれ 来
 けとる盧同ら男居あまのうらま 邦

芭蕉

さつ本つとるる力の掛 北
 昔ふらるる草花うらまはれ 蕉
 ひらり垂りし今朝の腰立 来
 けとる乙女二月あしのも 北
 雪まよふ草花うらまはれ 邦
 火とゆつらるる草花うらまはれ 来
 ほととぎす草花うらまはれ 蕉
 瘦骨のうらまはれ 邦
 隣城うらまはれ 北
 うらまはれ 蕉
 けとる草花うらまはれ 来
 せいでけとる草花うらまはれ 北
 たをひ切らるる草花うらまはれ 邦
 青天よ有明力の報け 来

湖の秋の比良のゆき
 葉の年暮ま無れて秋といひ
 布子忌やあつ風の夕暮
 押合て縁こい中こいさう
 たらのそのやうと未だ
 一こりうく秋つらうと
 枇杷のよりふよ木の芽
 俳諧集
 あらうこや雪かたぬ
 夕より秋作る指のま
 曆よむ人ふた里も安
 かり牡丹の名はひらけり
 歌しふ方とらうの上
 扇の角ははくを奉
 園風
 九六

春よあつ耐瘧の靴はけ
 こり非つまお監り
 馬の鞍ふかておちる
 おこぢを物に運繩の
 伊勢の海よこれ素
 敵の首はれらる古
 村人の罪の遠よ
 精は門徒はさると
 造り出に今年れ酒
 力も名流りのや
 際うりや溝は穂
 ふくまあつに
 をまのの樂は衣
 出かけたる饅頭
 芭蕉
 木白
 額
 配
 麦
 風
 考
 品
 残
 刀
 風
 麦
 蕉

このこれよ遊ユどのオのセほるも今イ白
肩ふおぬる供のこころし額
残る雪男にらんらん里より風
寂てたの夜を遊 暮る 暮
華礼ふまほる、馬の表より品
女嘆こころ井の戸のうち 芳
後朝の亥ねりの餅を配ると 産
脊中ハまきく既うちける 白
志くれさる様の中忘たうれと 額
子成ひうさるる様はの奥 刀
致イまをタ答く馬帽子傾けて 白
ふイこロりイや族々イ表 残
七夕にうたをかいたる涙ふさ 風
家賣りて世ハあー死なると力 蕉

卒

柿の本の枝もたりの花を帯て 表
花てとく備一各中こまなる 芳
被り者の踏まうたなるはつし 額
お斗の星ははくひまうさき 白
唇の爪あうりまきく啼ぬらん 残
松ハ一本山の林ハ 風
を食してたよきたる薦すれ 蕉
雉子しこむと怖いさふれ 芳
春雨はうらうく解のたけりて 刀
おれぬ方の教冬ははむ 表
いころい人を整ふらん 品
家王の末て花色は名と同 白
引くつくあやらの階ふねたけに 芳
目の星ふいてとくく 風

力れあきつゝし教ふるらん蕉
庵うらうし意のこかひひ刀

壬生山家集

百歳

みちよりのやふ斗の早の市前

笛の音こぼる曉の橋式之

一ほうい産のまこ麻るねたこ芭蕉

まじりけ前田面逆けい夢牛

盃のふ城あつためん善行方村被

腕押はらうたさの衣ま槐市

云殿の羞の中けたろひ梅額

素良の小孫買も布は下りし蕉

挑灯ととほせといひし陸田牛

紙衣羽織ととこし白いせ之

借し成えよりくふ多きて百

夫

ふるさど名傑の志としくろ額

有竹の匂おく彫又餅とふせ市

米はくらさる青山の秋村

ちかちかひの緒を作あせろ蕉

瓶こよ添へく出と白糸之

杖つとてのほれへ坊ろ乳の坊額

空あつてかまほとめ急こり百

まけおとて猿に小唄成なせろ村

雲を巻の扇風よ昼く度柳子額

面うけよおかごたる唐園麻蕉

おまのうらり香風よ志らろ牛

ろろしとつらまおきのこと之

ゆくころ雀義らつこゆく村

紫雲の市れゆり酒買て市

昨日の鐘錶の音も聴たり之
いふ妻よ海濱から水汲む村
春小けこいやあおの級百
子と名つづける女はあつとひて
ちとれおまうくつる棟札之
お衣よ下ゑの烏帽子は傾けし額
幕成志はれい皆けしとらる蕉
雞のうちよもこれの盃あれや之
細うの波よもある陽を市
舞臺の射場やけんと手挽て百
院よはさるすまれつとと村
物の親

上野寺にて
春日の井成友よ申すもい
色蕉
花先

きよ土民の供物納むる 示石
水える苔のぬけけいし雇唱て 凡非
笛よ吹くくくく表楯の声 去来
ふよりくことふき入方の歌人 景桃
秋よ突おる虫食の杖 心州
實入よとと忌殺の早稲の赤い 史邦
星道くふる馬の足蹟 玄哉
押さひて大ふこれらうまう糸 石
奉加よ出る僧の首 途蕉
あゝ川や霖屋の土ごふしぬき 来
たしれたりし荆 咲々り 兆
洗濯よやとれ歩けぬう業 州
猫のいゝ又の声も恨めし 桃
玉いゝと下いもととあ思ひ 尾

皆白張のふとほあるなり
 高麗人は名ふとる石と死
 まきの海辺に潮の浪
 魚下り麻たぬえにゆて
 雨はろくくと南吹くあり
 茶降隣つくとれあうり
 日成るごとくし知らん
 らう後短くあふら九十五
 たさくるとして及まぬ
 雨ふる宮は後若くは
 藤の里のおてく鳥
 倉庫のうとくつれ鳥鳴
 野中よ於る所の有たけ
 石細く小雨ぬるる地花
 百 邦 春 石 桃 邦 来 哉 燕 桃 来 北 邦

世ハカクノ才芋焼て喰人兆
 萩と子に落成毒小家達て
 由やの麻書に小月小日の乾
 泣しむ小さ草鞋の求めぬ
 たもこの飛の風は動るも
 美田小鼻表とんむ花雪り
 産はあへる鶴の羽をひ
 邦 桃 哉 来 百

定鞋しらやのせき
 糸を出て乙州の就宅よ

人よ家成こいせて我れとる

乙州の東りさきて
 雪とさくえより揚やしの雪
 智明

